
賢者の息子と呼ばれても

夜夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢者の息子と呼ばれても

【Nコード】

N0012X

【作者名】

夜夢

【あらすじ】

世界有数の魔法の使い手として知られる“虹髪の賢者”ティアスを親に持つ少年ケルティス……少々特殊な出自と環境で育った彼は、セオミギア大神殿学院の学舎に入学することになった。

そんな彼と彼の学友達に学院生徒としての日々が幕を開ける。そんな彼等が繰り広げる愛と友情と勇気と……魔法（？）の物語。

こちらには初の投稿となります。楽しんで頂ける良いのですが…

…

序章（前書き）

今回、若干残酷な描写と取れる内容が含まれております。

序章

“彼”は仲間と共にある機体の内部　その操縦室の一つの席に座っていた。

そこは十人ばかりの人間が納まるに十分な広さを有したおよそ半球形の空間に、数席の座席が配置され、それらの席の前には様々な計器の並ぶ表示盤とそれに対応した様々な機器の操作盤が配された卓が設置されている。

“彼”の仲間は各々の席に座り、部屋の外壁に広く表示される外部映像やそれぞれの席の前に設置された表示盤に並ぶ計器へと目を走らせ、それらの状況に応じて操作盤に並ぶ操縦桿やスイッチ類を次々と操作している。

勿論、“彼”もこの機体に搭載された主砲以外の各種魔導砲や飛鱗弾の制御を中心とした操作とこの機体自身を媒介に利用した魔法の詠唱を担当している。先程まで　この地に到達するまでの空中戦において、この機体へと群がる無数とも思える敵影に対し、魔導砲や飛鱗弾を駆使し、機体周囲の空間に複数の立体魔法陣を展開しての迎撃でかなりの集中力を消費したのだろう。人知れず溜息が漏れる。

だが、周囲の仲間はそんな“彼”の溜息に気付ける者はいないようだ。何と言っても、彼等の目前には真に相対しなくてはならない存在が鎮座しているのだから……

それからの戦いは熾烈を極めた。

幾百、幾千　或いは、幾万であつたか　と言う途方もない頭数の敵と相對するよりもなお、目前の一柱と相對することは彼等にとって熾烈なものを感じずにはおれなかつた。

先の突破戦において、たった一撃で一匹から数頭の敵を撃墜した副砲群の集中砲撃も、世界最高最強の魔法金属で出来た巨大な爪牙による格闘戦も、今相對する存在に有効な一打となっていない。むしろ、こちらの機体を鎧う爪牙と同質の魔法金属製の鱗や装甲は見事に削れ、穿たれ、その内在魔力量は想定された以上の速度で消耗いや、損耗している。致命的な一撃こそ受けていないが、それも時間の問題と思われた。

そんな厳しい状況の中、部屋の中に声が響いた。それは、この機体内の別所にて機体中枢を司っている仲間の声だった。彼の提案とは、この機体の主砲　^{プレス・キャノン}　竜吼砲の最大威力砲撃による乾坤一擲の攻撃をしかけると言うものだった。

だが、そんな彼の提案に部屋の中央の卓に座する金髪の女性が反論の言葉を放った。何故なら、機体の内在魔力量は主砲を起動させる為の限界量を割り込み、その残量は危険域に到りつつある。この状況では、最大威力どころか主砲を起動させることも困難なことは目に見えていた。

反論の言葉を紡ぐ彼女の声を耳にしながら、“彼”は、彼が何をなそうと逸早く察する。故にこそ、彼が無茶な真似を始める前に“彼”は席を立つ。

席立つた“彼”は部屋中央に設置された卓へと歩み寄り、その卓上に設置された水晶球へと手を伸ばす。そして、“彼”は水晶球に

手を触れたまま、自らの意識を集中させる。

この水晶球は機体の無限魔力炉と連結された端末であり、水晶球に触れている者の魔力を魔力炉へと供給する機能が備わっている。常人の　いや、一般的な魔法使いの数十倍を秘めると言う“彼”の魔力を全て魔力炉へ注ぎ込んでゆく。その姿を目にし、周囲の仲間達も同じく水晶球の許へと手を伸ばす。

いまだ激しい戦闘が続く中……機体の機動を司る別所にある彼と、機体内の魔力を管理する金髪の彼女の二人を除く、仲間一同が水晶球に手を触れ、各々が魔力を機体の魔力炉へと送り込む。

だが、水晶球に触れる者達は一人、また一人と膝を付く。“彼”にとって大切な黒髪の彼女も艶やかな黒髪がくすんだ銀色に見えるまで色を落として両膝を付き、別の仲間は煌く金色の鱗が艶のない灰色にまで彩りを失って床へと倒れ込む。

次々と力尽きる仲間達にやや遅れて“彼”もまた膝を付く。そんな中で、強い脱力感に霞む視界の隅に映る計器盤の一つに意識を向ける。

そこには機体の内在魔力量を表示されていた。だが、そこに表示された数値は先程と比して、全体の2〜3割程度の量が増加しているものの、満タンには程遠い状況にあった。更に戦闘機動による消費と、相対する存在の“御力”の作用もあつて魔力残量は減少して行く。

このままでは、先に彼がした提案　乾坤一擲の最大砲撃を放つことが厳しい状況を変えることが出来ない……そう結論付けるしかない。

その結論に到った“彼”は、自らに鞭打って再び立ち上がった。

視界の隅に揺れる自らの髪の色が普段の色味を失っていることを気にする余裕もない。

そして再び、“彼”は水晶球に手を伸ばした。その姿に倒れ臥していた仲間達から声上がる。

だが、そんな声を無視して、彼は集中を開始する。自らの生気を魔力に変換し、それを元に古代でさえ禁忌とされた魔術を唱える。

室内に朗々と詠唱が響く中、水晶球に触れる“彼”の左手の指先から、ゆつくりと無数の小さな燐光が溢れ出し、水晶球へと吸い込まれて行く。燐光が溢れ出すたび、“彼”の指先が徐々に色を失い、実在感を失い、その先端から消滅して行く。

自身の身体と魂を、魔力に変換する魔術　帝国魔法の上位呪文にあつて禁忌の術とされる魔術を用いて、“彼”は機体への魔力注入を再開させる。

危険域側に落ち込んでいた魔力残量を示す表示が目に見えて上昇して行く。

計器が示す数値の上昇に、小さな歓声を上げた室内の一同であったが、再度“彼”の方に首を巡らせた瞬間、絶句することとなる。そこには左肘より先を燐光と化して失った“彼”の姿があったからだ。

十　十　十

最終的に、“彼”は左腕一本を捧げることで、機体の内在魔力量を最大値まで充填することに成功した。充填した魔力は、別所にある彼によって魔力炉内で増幅・変質を繰り返し、主砲へと送り込まれる。

それら主砲発射手順の進行を何処か坦々とした調子で告げて行く

金髪の彼女の声が響く中、突如として“彼”のいる部屋が鳴動する。それは、今までの戦闘によって生じたそれとは異なる種類のものと直感的に感じられた。と同時に床に叩き付けられる様な不意の加重に襲われた。

一瞬の間で終った加重から開放された彼等は視線を外壁に設置された外部映像の表示へと向ける。

そこに映されていたのは、眼下に広がるのは激しい戦闘で荒らされた森林地が映っていた。そして、文字通り山程にもと形容するべき巨大な漆黒の竜と、その巨竜よりも幾周りか小さいそれでも皆程と形容できる巨大さを誇る金属で出来た機械の竜の二体が相對している。

両者は互いに向けて、その巨大な顎門を開き、その内に溜め込まれた魔力を放つ。

機竜の放つ万色の光条と、漆黒の巨竜が放つ闇色の光条が激突する。

二つの魔力の奔流は激しく闘ぎ合い、互いの軌道を微妙に歪め合って交錯する。

機竜の放った光条は、漆黒の巨竜の右肩を大きく抉り取り……漆黒の巨竜の放つ闇色の奔流は、機竜の右頬から右脇腹にあたる一帯を深く穿つ。

穿たれた機竜の脇腹から内部機構 無限魔力炉が露出する。それは先の闇色の奔流の一撃によって損傷を受けていたことが窺い知

れた。

両者の放つ光条の交錯が収束した直後、機竜の損傷を受けた各所より、次々と爆炎や噴煙が吹き上がる。

そして、爆炎と噴煙が機竜の全身を包み込んだ直後……彼等が乗り込んでいた機体 金属の鱗に鎧われた機竜は、爆散した。

爆散する機竜の姿を映し出す外壁を凝視する“彼”の背後より、金髪の彼女が上げたであろう身も世もない悲鳴が室内に響き渡った。

第一章：目覚めの時

そして、“彼”は目を覚ました。

見慣れた部屋と身に馴染む寝台の感触……それらを微睡みと覚醒との間を往き来しながら噛み締めつつ、彼は小さく呟いた。

「……………あ……………夢か……………」

ポツリと口から漏れた自分の呟きを耳で聞き、彼はその身体を寝台から起す。そして、自らが思わず漏らした呟きを思い出し、彼の表情に苦い物が混じった。

先程まで彼が見ていた夢は、ただの夢　事実無根の荒唐無稽な代物の類と言う訳ではない。彼の記憶の中にしっかりと刻まれた事実　実際に起こった出来事である。だが、正しくは……この記憶の本来の持ち主は、彼自身ではない。

そこには、少しばかり説明するには複雑な事情が横たわっている。

さて、身を起し複雑な表情で覚醒を終えた彼の耳に、コンコンと扉を叩く音が届いた。

その音の方へと首を巡らせた彼は、自分の部屋の扉を開いて中へ入ってくる女性の姿を捉えた。

女性……と表現したものの、彼女を初見で目にした多くの人々がその表現を素直に頷けるかは少々微妙な所かもしれない。

彼女は濃紺のワンピースに白いエプロンと言う組み合わせのエプロンドレス　所謂、一般的な侍女の装いを身に纏い、赤味があった艶やかな飴色の髪をエプロンドレスに合ったヘアバンドで纏めてい

る。そして、それら侍女としての装いを纏うその身体は、ある意味で女性の理想とも言えるメリハリのある優美なラインを描いている。ここまでを聞けば、女性と言う表現に疑問を持つ要素はないだろう。しかし、彼女の顔やエプロンドレスから覗く素肌は、木目の浮かぶ木材によって出来ており、衣装から除く関節部は一部の人形で使われるような球状の部品で連結された様な機構となっている。更に言えば、彼を見詰める彼女の目には、白目と黒目の区別より詳細に言えば、虹彩と瞳孔の区別さえ存在しない銀一色の代物となっている。

つまり、部屋に入って来た彼女は一人の女性と言うよりも、むしろマネキンや人形と表現した方がしっくりと来る容姿をした存在なのだ。

彼女の名前はメイ、彼の家に仕える侍女達の筆頭を務める女性だ。

そんな、見る人によってとは異様な姿と映る彼女は、寝台で身を起した彼に向けて優雅な風情で軽く頭を垂れ、水晶を鳴らしたような涼やかな声で語りかけた。

「おはようございます、坊ちゃま。お目覚めになりましたか？」
表情の変化に乏しい彼女の顔は、一見すれば無表情にも見受けられるが、その言葉や身に纏う雰囲気から微笑を浮かべたような穏やかで温かな感じが感じられる。そんな彼女に向け、彼も微笑を浮かべて挨拶の言葉を返した。

「うん……おはよう、メイ。もう、目は覚めてるよ」
そう言葉を返す彼に、小さく首肯して彼女　メイは寝台の方へと歩を進める。そして、寝台の許へと歩み寄った彼女は、左手に抱えた衣服を寝台の上に置き、彼に向けて言葉をかける。

「今日のお召し物は、ここに置いておきますね。お着替えはお手伝い致しますようか？」

「うん……大丈夫、自分で出来るよ」

寢台から降りながら彼はメイの言葉へ答えを返す。

そんな彼の様子に、メイは無言で頷きを返して寢台の傍から離れ、部屋の一隅に置かれた大きな布を被せられた家具の許へと歩み寄る。そして、メイは被せられた布を取り外した。その布に覆われた家具とは、彼の身長より大きな一枚の鏡。姿見であった。

メイは被せられた布を綺麗に折り畳み、姿見の傍らの小卓に置いた。

「それでは、私は朝食の準備に戻ります……失礼致します」

そう言って一礼すると、メイは彼の部屋から退室した。

寢台から降り、寝間着を脱ぎ、彼は用意された衣服に袖を通す。

白地に灰色の縁取りが施された神官衣に似た意匠の長衣を纏い、彼は自らを姿身に映してみせる。

その姿見に映るは、年の頃は十歳程度の少年の姿である。

細身で色白な身体をした姿は、この国に住む主要民族　ユロシア人としては一般的な特徴と言える。その鏡面を見詰める瞳は銀色であり、これもユロシア人としては多くは無いものの特別に珍しいと言う訳でもない。鏡面に映る顔立ちは、一応は整っているが、特筆する程に人の目を惹き付ける様な美しさを持っている訳ではない。しかし、そんな個々の要素を掻き消す稀有な特徴が彼にはあった。その特徴とは肩にかかる程度に伸びた長い髪の色……黄金・白銀・黒紫・赤紅・紺青・碧緑・透白の七色が斑模様に入り混じった独特の調和のある彩りを見せている。

世の人々によって“虹色”と形容されるこの色合いを身体に帯びる者は、非常に珍しいことを彼は知っている。だが、彼は知ってはいるが、実感しているかと言われれば、そうとは言い切れない所があった。

彼の名は、ケルティス＝コアトリア……北方大陸の一国家　セ
オミギア王国の新興貴族、コアトリア家の子息の一人である。

* * *

身支度を整えた彼　ケルティスは、自分の部屋から出た。朝食の準備と言う話を聞いていた彼は、食堂へと続く廊下に足を進める。

食堂へ続く廊下を進む彼が、幾つかの廊下が交差する所に差し掛かった時、一人の女性の姿が目映った。

神官衣に身を纏う彼女は、色白で痩身の身体に、背にかかる程の長さに伸びたくすんだ金髪と言う姿をしており、それらはユロシア人として一般的な容姿をしていると言えた。だが、彼女の容姿の中で最も印象を与えるだろう特徴は、その瞳の色合いである。彼女の瞳　虹彩の色は、ケルティスの髪色と同じ物である“虹色”の色合いを呈している。

神官衣を纏う彼女に向けて、彼は挨拶の言葉をかける。

「おはようございます、ラティルさん」

「おはようございます、ケルティス君」

その声に振り返った彼女は、柔らかな微笑を浮かべ、穏やかな声で挨拶を返した後、その目を笑みで細めつつ言葉を続けた。

「学院生徒の制服、似合ってますね」

「……あ、ありがとうございます」

彼女の発した褒め言葉に、白皙の顔を朱に染めると言う、分かりやすい照れ方を見せたケルティスは礼の言葉を述べた。

そんな彼の様子を微笑ましい面持ちで見詰めていたラティルは、短く言葉を返した後、別の話しを口にした。

「……そうだ。今さっき朝食の準備が終ったから、メイ達が食堂へ朝食を運んでいる筈ですよ。私達も急ぎましょう」

「は、はい……そうですね」

そう言葉を交しながら、二人は食堂に向って一緒に歩き始めた。

今、彼と共に廊下を進む彼女の名は、ラティル「コアトリア……」
八大神の一柱にして知識神と崇められるナエレアナ女神を奉ずる世界最大の神殿であるセオミギア大神殿に仕える神官の一人である。
そして、彼 ケルティスの姉の夫である女性である。

何かの言い間違いの様な説明だが、これは間違いのない事実である。
そこには、少々込み入った事情があるのだが、それは後で説明する
としよう。

* * *

ケルティスとラティルの二人が食堂に入った時、そこでは食卓へと朝食が並べられている所であった。

侍女長であるメイの指図の下、この家の侍女達 メイと良く似た容姿をした木製の身体を持ったものたち によって、配膳車に乗せられていた朝食や食器類を各自の席の前へと配膳されている。

そんな侍女達が動き回っている中、食卓の上座に座っている人物より言葉が発せられた。

「おはようございます、ケルティス、ラティル君」

一見して青年か呼んで良い年頃に見えるその人物は、“虹色”の髪と銀色の虹彩を持つ顔立ち、外見上の年の差を考慮すればケル

ティスと瓜二つと言う程に似通っている。そして、ラティルが纏う物より若干意匠の異なる高位神官用の神官衣を身に付けていた。

この人物の名は、ティラス「コアトリア……セオミギア大神殿を統括する九院の一つである書院の長を務める人物であり、セオミギア王国新興貴族の一つであるコアトリア家の創始者にして、現当主である。ちなみに、ケルティスの親に当たる人物でもある。

「おはよう、お父さん」

「おはようございます、書院長」

この家の当主たる人物の声に、入室して来た二人は口々に挨拶の言葉を返した。

そんな二人に　より正確には、その内の一人に向けて声がかかる。

「遅いぞ、ラティル！　待ちくたびれたぞ！」

声を張り上げたのは、当主ティラスの右隣に座る一人の女性……“虹色”の髪と銀色の瞳を持つ麗人であった。凛々しさや精悍さと艶やかさの同居した彼女の美しさは、十中八九の人の目を惹き付けるに足るものだろう。その身を包むのは、白地に薄青の縁取りを施したこの国の騎士団の平服である。

彼女の名は、レイン「コアトリア……セオミギア王国白牙騎士団を構成する十二隊の一つである第十番隊隊長を務める騎士である。そして、ティラス「コアトリアの長女であり、ケルティスの姉にして、ラティルの配偶者でもある。

妻の張り上げた声に、慥然として肩を落としたラティルは、脱力した調子で言葉を返す。

「……………レイン……………無茶を言わないで下さい。」

朝食の準備の後で着替えることは、承知していた筈でしょう?」

「それは知ってる。それでも遅いから遅いと言ってるんだ」

食堂の入口と食卓の席上の間を飛び交う夫婦喧嘩染みた女声の応酬に、ケルティスは少しばかり居心地の悪さを感じて首を竦ませる。

そんな時に別の方向から声が上がった。

「レイン!……それぐらいにしておけ。」

ラティルも、そんなことの相手をしていないで席に着いたらどうだ? ケルティスが戸惑っているぞ」

「……………」

「す、すみません」

その声の主は、ティアスの左隣に座する女性であった。その姿は、向かい合って座るレインと瓜二つの容姿をしている。しかし、その髪と瞳の色は、ユロシア人としては非常に珍しい漆黒にして、その身に纏う服は意匠こそレインと同様だが、その地の色は漆黒となっている。

そんな彼女の声に、レインは不貞腐れた様に黙り込み、ラティルは恐縮して頭を下げた後にそそくさと席に急ぐ。そんなラティルの歩みに促される様に、ケルティスも自分の席に向って歩き始めた。

そうして、自分の席の前に立ったケルティスは、先程二人の言合いを制した女性に向けて挨拶を交した。

「おはよう、セイシア……母さん」

「うむ、おはよう、ケルティス」

この黒髪の彼女の名は、セイシア「コアトリア……セオミギア王国白牙騎士団の副団長の第二席を務める熟練の騎士である。そして当主ティアスの細君であり、レインの母親たる人物である。

互いに挨拶を交し、ケルティス達が席に着くと、食卓を見回したレインが改めて口を開いた。

「……それにしても、あいつ等も来るのが遅いな……」

「そう言えば……まだ、起きて来てないんですか？」

「ああ……ったく、休み明けだからと……」

レインの呟きに、ラティルが言葉を返した直後、食堂の扉が勢い良く開かれた。

「おはようございます！」

「ふあゝあ……おはよう……」

開かれた扉から、一方は焦った様子で、もう一方は暢気な様子で、食堂の一同に挨拶が届けられる。

飛び込んで来たのは、少年と少女の二人である。いずれも、ケルティスと同年代……やや年長と思わせる年の頃をした少年少女である。

少年は“虹色”の髪に碧色の瞳を持ち、生真面目さと気弱さを窺わせる面持ちは何処かラティルの面影と重なる。一方、少女はその髪と瞳に“虹色”の色を纏わせ、欠伸を隠さぬ屈託のない快活さが窺える面立ちには、レインやセイシアに通じる造作が垣間見える。

欠伸を漏らす少女の様子に、ラティルやレインが胡乱な目を向けてくる。しかし、そんな様子に全く悪びれた様子も見せず、少女は悠々と自分の席に着く。

一方で、一足先に食堂へ踏み込んだ少年の方は、自分に向けられた訳ではない二人の視線に幾許か恐縮した様子を見せて、少女の隣の席へと着いた。

少女の名は、レイア「コアトリア」……レインとラティル娘であり、共に入室して来た少年の姉に当たる人物である。

そして少年の名は、フォルン「コアトリア」……こちらもレインとラティル息子であり、共に入室して来た少女　レイアの弟に当たる人物である。

こうして食堂に集った七人に、もう一人を加えた八人が……ケル
ティスの家族たるコアトリア家の面々である。

そんな彼等は、世の人々から畏怖と崇敬の念を込めて “虹の一族” と呼び習わされていた。

第一章・目覚めの時（後書き）

どうも、夜夢と申します。こちらへの投稿は初めてとなります。
不定期の投稿となるかと思いますが、読んで頂けるなら幸いです。

第二章：朝食の風景

食堂に一家の皆　今朝、この家を留守にしている一名を除き
が集ったのを見計らった所で、当主であるティアスは一同に向けて
呼びかけを行う。

そして、白皙の生身の右手と銀色に輝く機械義手の左手を組み、
食前の祈りの最初の一節を唱える。彼の声に続いて、一同は両手を
組んで食前の祈りの言葉を唱えた。

*
十
*

さて、八百年近い歴史を持つセオミギア王国の中で、初代当主
ティアスの叙爵を創始とするコアトリア家は三十年余りしか経過して
おらず、貴族としては非常に歴史の浅い新興の家柄でしかない。し
かし、彼と彼の家族はセオミギア王国のみならず、ユーロシア大陸北方大陸にある
諸国に対しても少なからぬ影響を持っている。

それは、ティアス「コアトリア」と言う人物が、単なる高位聖職者
で表現するには足りない背景を背負う人物であった。そもそも、彼
の出自そのものが尋常ではないのだ。

彼の本来の両親が誰なのかは、未だに謎に包まれている。公式に
知られているのは、今から五十年以上前になる人暦3000年の冬
の日に、セオミギア大神殿の正門に生まれたばかりの彼が捨てられ
ていたと言ったことである。

そんな嬰兒であったティアスを拾ったのが、セオミギア大神殿を

訪れていた聖蛇エルコアトルであった。この聖蛇エルコアトルとは、知識神ナエレアナ女神に仕える最高位の眷族にして、魔法の司る神と崇められる神である。そして、神代の終焉より地上を去った神々の中にあつて、地上に残った数少ない高位神族の一柱である。

そんな神の一柱とその眷族や鎮座地を接する白竜王フォルグローンとその眷族等の中で、彼の神々の鎮座地たるセオミギア王国の北西に聳える“聖蛇山脈”で育つたと伝えられている。

そして、そんな環境で育った彼は、あらゆる系統の魔法を操り、様々な知識を有する大陸どころか世界でも有数の大賢者である。更に、その容姿は、人々の前に降臨する際に人の形を取る聖蛇エルコアトルのそれに瓜二つであつた。特に彼が持つ“虹色”の髪色とは、本来は聖蛇のそれであり、彼に仕える眷族の中に稀有な確率で身に帯びることが可能な色の筈なのだ。

そんな彼に与えられた二つ名は、“虹髪の賢者”、“聖蛇の養い児”等がある。特に前者は、本来なら聖蛇エルコアトルの称号である。

また、若き頃の冒険行で左腕を失い、他大陸の友人より機械の義手を送られたことから“銀腕の賢者”とも称されている。

セオミギア大神殿の高位聖職者として、高名な冒険者として、世界でも有数の魔法の使い手として、彼は広く名が知られた人物となっている。

*
†
*

さて、話を戻そう……

ティアスの主導によって行われた食前の祈りを終えた後、家族一同は食卓に並べられた朝食を口に始める。

そんな皆と同様に、ケルティスも目前に配膳された朝食へと右手を伸ばした。

今朝の献立は、まず白パンに、塩漬け肉の薄切りと目玉焼きに茹でた菜類の付け合わせ、それと陶製の杯に入れられた乳……と言った品々である。皿に盛られた塩漬け肉と目玉焼きの欠片を口に運び、やはりラティルの采配であったことを確認し、同時に感謝しつつ、彼は舌鼓を打つ。

それは、ケルティスの対面に座る少年少女　レイア・フォルン姉弟も同様らしく喜色を表した面持ちで朝食を口にしている。

* * *

実はこのコアトリア家において、まともな料理を作れる者がラティルしかいないと言うのが現状なのだ。

家事を預かる筆頭侍女のメイは、そもそも人間ではなく、人間の味覚と言うものを認識するにはいまだ経験が絶対的に不足している。次第に甘味や塩味等を判別できる様にはなっただけで来ているらしいが、人間が美味しいと思える味の配分と言った問題に関してはまだまだ判断できない様子である。

そして、彼女に仕える侍女達は、そもそも自分の判断と言うものに行えない存在でしかない。

一応の一家の女手と言えるセイシアとレインは、母娘揃って家事と言うものに関する才は渉々しくなく、特に料理に関しては壊滅的と言って過言ではない。

何と言っても、今朝の献立と同様の物を用意したとすれば、恐らく塩と炭の味しかない代物を悪びれもせずに出すだろうことは、まず間違いない。

更に言えば、そんな壊滅的な料理を何も気にすることなく腹の中に納めてしまっただろうことも推察できる。要するに、味覚が常人に比して問題のある人物なのだと言えるだろう。

一方で、ティアスはと言えば、そんな異常な味覚の持ち主ではないものの、その感性が常人とはかけ離れているのが問題と言えば問題なのだ。

彼は食材として、虫やら蛇やら魔法の触媒に使っ薬品やらと言った、通常食材として数えることない物を平気で食材として並べて料理を始める悪癖がある。本人は古代から現代、四大陸や五大海洋の各地に伝わる様々な調理法の知識を駆使しているに過ぎないのだが、結果として突拍子もない代物が高確率で出来上がってしまう。

その為、出来た物の味はそこそ良いものの、外観や使った原料の情報等から微妙に美味しいと言い辛い代物となることが少なくない。

結果として、常人と同様の味覚と感性や常識を弁えたラティルが、メイ達を指揮して料理を行うことがこの家の慣習になっている。

とは言え、ラティルも仕事の都合などで、毎日の食事を常に指揮できる訳ではない。そんな時には、他の大人達の手による何処か残念な料理を口にするしかないのだ……

* * *

ともあれ、今朝はラティルの差配で用意された朝食は、特別に贅を凝らしている訳ではないものの、素朴でも手間を惜しまずに作られたのがよく分かる美味しさをケルティス達に与えていた。

そんな朝食に口元が綻ぶケルティスが陶製の杯を口に付けた時、その表情が驚きの色に変わる。

そして、自分が感じたそれが間違いでないかと、再度杯の中身を一口だけ口に含んだ彼は、それが間違いでなかったことに二度驚くことになった。

「……………！……………これって……………バナア・ミルク狼牛の乳……………？」

* * *

バナア・ミルク狼牛の乳とは、文字通りバナア狼牛と呼ばれる幻獣から摂れる乳のことだ。

バナアと言う幻獣は、狼牛の名が示す通り、鋭い牙と鉤爪の様な蹄を有する牛に似た姿を持つ獰猛な魔獣チユルク大陸と言われており、東方大陸の山岳域に棲息している。自分の縄張りに侵入して来た者を、容赦なく襲撃する攻撃的な性格でも知られている。

一方で、正々堂々と相対して打ち負かした者には一定の従順さを示すと伝えられている。

バナア・ミルクその様な対決の後に従順になったバナア狼牛より搾り取れるのが、バナア狼牛

の乳である。

その味は、普通の牛乳等に比べても濃厚で芳醇な甘味と旨味を持ち、栄養が豊富なことでも知られており、呑んだ物は精気が増し、呑み続けることで不老長生なるとも噂されている。

尤も、飼い慣らすことも出来ず、搾取に多大な危険を伴う狼牛パノア・ミルの乳を継続的に呑み続けられた人物等、歴史の中でもどれ程いるか判らない訳だが……

そんな訳で、狼牛パノア・ミルの乳は東方大陸チュルク大陸においても、一杯の対価がかなりな高額になっている。ましてや、他大陸のこちらで入手することはほぼ不可能であり、その一杯に一財産をかける価値があることは知っている。

*
十
*

平民出で庶民的な感性の持ち主であるラティルの献立の中に、こんな品物が紛れ込んでいることは少々……所でなく不自然なことに、ケルティスには思えた。

そんな訳で驚きに目を見張ったケルティスが、問いとも呟きとも知れぬ言葉を漏らしてラティルの方へ首を巡らした。その視線の先には、微笑を浮かべて彼を見詰める彼女の姿があった。

「先日、リュエン・ジンラン様より贈られて来たんですよ。貴方の入学祝について……」

ラティルの口から出たティアスの他大陸に住む友人の一人である

リュエン・ジンランの名に、ケルティスは再度驚かされた。

「え……?」

「え……っ!」

……あたしが入学した時には、こんなの出して貰ってないよ!」
出された杯に舌鼓を打っている間に交わされた会話を耳にして、
レイアは不満に口元を歪めて不平を漏らす。

そんな娘の様子に憮然とした面持ちで言葉を返す。

「あの頃は、長期保存用の魔法を付与した瓶がなかったからだよ。
最近、書院長が試作した瓶の幾つかをリュエン家に贈ったのだけど、
お礼も込めて贈って下さったのだよ」

「む……」

ラティルの返答に、レイアは歪めた口元を直さぬまま唸りを漏らす。
そして、杯を口に運び、少し複雑ながら嬉しそうに口元を綻ばせる。

* * *

中々口に出来ない品を嬉々として口に含む子供達を見遣りながら、
セイシアは幾許かの感慨が込められた呟きを漏れる。

「そうか……ケルティスも今日から学院生徒か……」

それにしても、神殿学院のお歴々が良く認めたよな」

「年齢の問題はともかく、身体的にも、精神的にも学院の講義を受
けられる要件は満たしていると判断できましたからね。

徒に年齢面での問題に固執すると、私の時以上の混乱を周囲に振

り撒く恐れもありましたし……」

彼女の呟きに、隣に座していた夫　ティアスより答えが返る。
自らが神殿書院の長を務めていることもあって、神殿学院側の事情
なども耳に届いているらしい。

「……………なるほどな……………」

夫の返答に、セイシアは微苦笑を漏らす。

山を降りて神殿の見習いとなつて間もなかったティアスが、各院
で起した騒動　見習いの筈の彼が、各院古参の神官が土下座せん
ばかりの実力をつつかり披露してしまった顛末は、一介の冒険者を
していた当時の彼女の耳にも届いていた。

その事に慌てた当時の^{大神殿の長}法院長が、世間を教える意味も込めて冒険
者となることを勧め、それが二人の出会いの切欠となつたのは、ま
た別の話だ。

苦笑を漏らしつつ視線を移せば、ケルティスヘレイア達が声をか
けている様子が目に映る。

「ケルティス、苛められたら、あたし等に言えよな！　とっちめて
やるから！」

「……………うん……………ありがとう」

「姉さん……………やり過ぎないでね。問題になって、呼び出されるのつ
て、僕の方なんだから……………」

「心配するな、フォルン。ばれない遣り口はセスタス小父さんから
色々聞いてるから」

「セスタス小父さんって……………それ子供相手に使う手口じゃないって
ことじゃ……………」

「そんなことは気にするな」

「気にするよ、セスタスさんの手口って……ヤバイ手口ってことでしょう？」

「どうかなく……？」

「否定しないってことは、そう言うこと？」

ケルティスへの励ましの筈が、何時の間にか姉弟喧嘩もどきに移りつつある状況に、向かいに座る少年　ケルティスは憮然として小さく肩を落としている。

そんな夫であるティラスとは些か異なる反応を見せる姿を目にして、セイシアは微笑を漏らした。

*
†
*

ケルティス「コアトリアは、“虹の一族”と称されるコアトリア家の一同の中でも特殊な出自を持つと言える者である。

彼は父母の間に産まれると言う、一般的な誕生を経ずしてこの世に生を受けた訳ではない。彼にとって血縁上で親と呼べる存在は、ティラスしかない。

彼は、ティラスが魔法的な手段で生み出したティラスの分身なのだ。

その身体も魂も、ティラスのそれを基に創造されている。

そんな彼　ケルティスの年齢は一年と数ヶ月を数える。

そして今日のこの日に、彼はセオミギア大神殿学院中等部への入学することになっている。

一歳と数ヶ月と言う年齢で、初等部を飛び越えての、中等部への入学……異例中の異例、特例中の特例と言う措置には違いない。しかし、“虹の一族”……いや、“虹髪の賢者”の息子と言う立場の者にとって、或いは相応しいものと言えるのかも知れない。

第二章：朝食の風景（後書き）

物語の中に背景説明を織り込むのは、やはり難しいですね……

本文をお読みの方々はお察し頂けるでしょうが、主人公ケルティス君の父君　ティアス書院長は所謂チートキャラとなっております……（苦笑）

ただ、主人公もチートキャラである可能性が否定できない所……（カワイタワラヒ）

第三章：大神殿への道行

朝食を終えた一同は、後片付けをメイと彼女が指揮する侍女達に任せて、それぞれ出仕や登校の準備を始める。

そして準備が整った一同は、玄関へと集まって各々の行き先に向って屋敷を出て行った。セイシアとレインは白牙騎士団の詰所へ、他の者達はセオミギア大神殿へと向う為に……

さて、一般的な貴族であれば出仕の際には、自家用の馬車を用いる例が少なくない。しかし、所詮は新興貴族でしかないとするティアスの方針もあってか、基本的に徒歩での出仕を行っている。

当然ティアス達は都市東部の一隅にある路地を、各々徒歩で大通りを目指して歩を進める。

彼等の住むコアトリア家の屋敷は、元々はセイシアの実家 ミレニアン家が別宅の一つとして所有していた屋敷であり、貴族居住区となっている都市東部の区画の中でも庶民の居住区である西部区画寄りの場所に存在している。お蔭で都市中央を南北に縦断する大通りに比較的近い場所となっている。

徒歩での出仕と言うこともあって、比較的早めに家を出ている影響もあり、路地には殆ど人気はない。ティアス達は人通りの少ない路地を進み、程無くして都市を貫く大通りへと出て来た。

都市を南北に縦断し、馬車が4〜5台が並んで通れそうな道幅を持つ大通りを彼等は北へ向けて歩を進める。

ここは、“神殿都市”の異名を持つ都市　セオミギア……北方
ア大陸
大陸西域　ユロシア地域に林立する小国家群の一つ、セオミギア
王国の同名の王都である。

王国としてのセオミギアは、古代王国崩壊後に到来した第二次竜世紀が収束して以降に成立した国家群の一つであり、その歴史は現存する国家の中でも古い部類に入る。しかし、都市としてのセオミギアの歴史は、それ以上の長さを誇っている。何と言ってもその始まりは、人間の建国した最古の国家の王都として成立したものであり、その歴史は既に三千年を越えている。

そして、この都市セオミギアの成立以来、久しく都市の中心として、或いは象徴として存在しているのが、セオミギア大神殿である。

この世界を創造し、世界に満ちる万物や摂理を創り上げた伝えられる八大神の石柱　“知識神”ナエレアナを奉じる世界最古最大の神殿であり、都市セオミギアもこの大神殿が建立されたことを起源とすると伝えられている。

事実、都市北部に存在する大神殿は、都市全体の約二―三割程度の領域を占有しており、神殿中央の鐘楼や神殿各所に存在する尖塔などは都市の何処から見ても取れるとも言われる程に高く聳え立っている。その様は、神殿東側に存在する王宮の存在が霞んでしまう程である。

神代の頃にあつて、“知識神”ナエレアナが鎮座していた場所に建立されたとされており、大陸西方域を中心
ユロシア地域
に北方大陸
ユロシア大陸
で盛んに信

仰される神であることもあって、各地からの巡礼が絶えず訪れている。

＊
十
＊

大神殿への参詣に向う巡礼の為にも整えられた大通りを、ティアス達は歩を進めて行く。

今日は光の満月祭にちなんだ春の休暇が明けたばかりの日と言うことや、いまだ朝も早い内と言うこともあり、人通りもまだ疎らな様子であつた。

そんな中で、ティアスとラティルは言葉を交しつつ進んで行く。

「……所で、メルテス君は如何したんでしょう？」

ケルティス君の入学の日はお祝いを言いに戻って来ると言う話でしたけど……」

そう呟く声に、ティアスは首を巡らせ微苦笑を浮かべて、その疑問の答えを返した。

ヤスガリア地域

「大陸北部域の諸国に伝わる伝承を調べに周っていたらしいけれど、街道にかかる橋の一つが雪解けの洪水で流されて、足止めされてしまったのだそうですよ。」

昨日、持たせていた“遠話の鏡”でセオミギアまで戻れそうにないと嘆いていました」

「それは……… 災難でしたね………」

「あの子らしいと言えば、あの子らしい話ですけれどね………」

そう言つて、二人は互いを見合い、苦笑を交した。そうして、また、違う話題へと話は移って行く。

「……… そう言えば、今日から暫く学院に出向することになっていま

したね」

「はい、学院の教師を務めるフィジエレア師が暫く休養を取られる
そうで、人手を借りたいと言うことらしいですね」

「確かに……そういう話は聞いていますね」

「ですが……それだけではなく、ケルティス君が入学するので、対
処できそうな人間を揃えて置きたいという思惑もある様です……」
「そうなのですか……」

二人の会話の中で、自分のことが触れられていることに気付いた
ケルティスが、恐縮した様子でラティルの方を向いて頭を垂れる。

「あ、あの……すみません……僕の所為で……」

その姿を目にして、口が滑ったと口元に手をやったラティルは、
すぐに悄然とした少年へ言葉をかけた。

「……気にしないで下さい、ケルティス君……時々、学院の講師と
して呼ばれることは今迄も何度となくありましたし、貴方の様子を
見守れる立場になれたことは、そんなに悪い気はしていないんです
から……」

「……はい……」

言葉を紡げども、しよげた様子から戻りきれていない義弟の姿に、
ラティルは少し困った面持ちで彼を見詰める。

そんな気まずい雰囲気を払拭する様に、少年の背を叩く感触と陽
気な声が投げかけられる。

「気にすんなよ！……ケルティスにモノを教えられる奴なんて、そ
うそついなんだからさ」

叩かれた勢いで少しつんのめったケルティスが振り返ると、そこ
には笑みを浮かべたレイアの姿があった。そんな彼女と目を合わせ
ていると、ちよつと冷めた感じの声が耳に届く。

「そんなこと言って……去年、学院で出された宿題をこの子に教わ
っていた人の台詞とも思えませんか……」

「フォルン！……そこは、教わっていたからこそ言える台詞だ、と言う所だろ！」

「どっちにしろ、あんまり格好の良い話じゃないですけどね……」

珍しく茶化すように肩を竦めて見せたフォルンの様子に、ケルティスは右手に持った鞆を持ち直しつつ、思わず短い笑いを噴出す。

その様子を見て、互いに微笑んだ姉弟はケルティスに話しかけた。
「ケルティス……今日は入学の式典ぐらいしかないし、終わったらあたしが学院の中を案内してやるよ！」

「姉さん、別にケルティスは大神殿に始めて行く訳じゃないんですからね……下手をしたら、姉さんより神殿のこと詳しいかも知れないって分かってます？」

「別にいいだろ……学院の中って、神殿とちょっと違う面白さってのがあるだろう？」

それに、生徒には生徒にしか分かんない事情とかがほら……

えーっと、………

「……自分で言ってる、訳判んなくなってますか、姉さん？」

ともかく、ケルティス、何か困ったことがあったら、僕や姉さんに相談してくれたら良いからね」

子供達の会話を耳にして、何とかケルティスの気分が直ったことにラティルは安堵の溜息を短く吐いた。

そんな彼女に向けて、ティアスは微笑笑と言った面持ちを浮かべ、柔らかな調子で言葉を紡いだ。

「書院の仕事はそれ程急ぐと言うものでも訳でもありませんからね

……暫くは、ケルティスの様子を見守っていて下さい」

「……はい、出来るだけのことをさせて貰うつもりです」

上司にして舅であるティアスに、ラティルは答えを返した。

そんなラティルの返事に頷きを返したティアスは、改めて浮かんだ問いの言葉を投げかけた。

「そう言えば、今日はその姿でいると言うことは、学院教師としてはその姿で通すつもりですか？」

「ええ……基礎魔法学の講義を依頼されていますので、それなら男性体よりも女性体でいた方が何かと便利が良いかと思ひまして……」
投げかけられた問いかけに、少し苦い表情を窺わせながら、ラティルは答えた。

「そうなる、ここ暫くは女性体で過ごすことになるのでしょね」
「……………そう言う事になるかと……………思います……………」

ギルダーフ学院長からも、生徒に混乱を与えない様に姿を変えるのは出来るだけ控えて欲しいと……………」

「そうですか……………それならば、頑張りなさいね」

何処か慚然として返される言葉とラティルの様子に、ティアスは短い励ましの言葉を送った。

＊
十
＊

さて、ラティル「コアトリアとは、以前にも述べた通り当主ティアスの女婿むすめむしに当たる人物である。女婿むすめむしと言う言葉が示す様に、彼の本来の性別は男性である。

平凡な商家の次男坊として生を受けた彼は、神官の才を認められてセオミギア大神殿書院の神官となり、当時から書院の長を務めていたティアスとの縁からレインと出会い、彼女と冒険者として苦楽を共にする日々を送った後に、コアトリア家へと婿入りすることになった。

そんな彼がレインと婚約を結ぶ際、ティアスによって与えられた

のが、今の“女性の姿”だった。それは『異相体創造』と言う魔法儀式を行うことで得られる“異相体”としての姿である。

“異相体”とは、上記の術式を行うことで、自身の肉体の諸要素を取り出し、ある種の手順やの魔力を込めることで本来の姿とは異なる性別や種族の身体として創造されたものである。そして“異相体”自体は、本来の身体とは魔法的に重なるように設置された亜空間に隠匿される。

その持ち主は、当人の意思や事前に設定された呪文等を切欠に、自らの身体を本来のそれから“異相体”のそれに入れ換えることが可能となる。

『異相体創造』の術式自体は、ティアスが考案・完成させた術式であり、彼自身は自らとラティルにこれを施術している。

これによって、ラティルは本来の「男性の姿」と、“異相体”によつて得られた「女性の姿」の二つの姿を持つ人物として、大陸西^{ヨーロッパ地域}方域でも広く知られた人物となっている。

ともあれ、“異相体”^{もう一つ姿}を得ることになったのは、コアトリア家に婿入りする際に引け目を消す為の措置と言う意味合いが含まれていた。

*
†
*

実の所、コアトリア家の全員が、ラティルを含めて正確な意味で男性とも女性とも言い切れない存在であり、同時に男性とも女性と

も言える存在である。何故なら、ラテイルを除く面々の本来の性別が両性であるからだ。

ティラス＝コアトリアとセイシア＝コアトリア……彼等二人とも、半天使の生まれである。

半天使とは、人間の祖とされ神々の眷族の末裔とも称される天使族の血を色濃く表した存在である。

外見上は通常の間人とな程変わりはないものの、知性や魔法的な才　特に聖霊魔法の才　に優れた面を示し、霊的・魔法的な知覚を有する者には天使族が背に持つと言う翼と同形の精気を認識することが出来ると言われている。

各地の建国伝説に天使やその混血児たる半天使が関わったという記述がある所為か、王族や貴族の家系の中に稀に生まれる例があるとされている。ティラスやセイシアもそうした者達の一人であると言える。

ちなみに、半天使の性別は、天使族のそれに準じて両性の生まれる確率が非常に高いことでも知られている。実際、ティラスとセイシアは両性体として生を受けている。

そして、二人の間に生まれたレイン・メルテスの姉弟もまた、半天使の両性体として生を受けることになった。更に、レインとラテイルの二人の子供であるレイア・フォルンの姉弟もまた、半天使の両性体として誕生している。

現状、ティラスやセイシアが魂の質や性状を見極めた上で、便宜上の性別として戸籍等で男女を振り分けている状態にある。

ただ、それらが便宜上でしかない良い例として、レインとメルテス、レイアとフォルンの姉弟としての関係を示すことが出来よう。
彼女等は同じ両親から生まれた姉弟であるに^{異父姉弟}関わらず、^{異母姉弟}腹違いにして^{異父姉弟}胤違いと言う関係にある。一見すれば赤の他人の様にも聞こえる関係だが、実の所は両親がその父母としての役割を入れ換えて産み落とした結果そうなたただけの話だ。

その影響もあつて、レイアとフォルンの年の差は、たった二ヶ月程度しかないと余談の類と言えるだろうか……

*
十
*

ともあれ、本来のものではない女性の姿でいることが、それ程厭わしく思わなくなつて久しい彼女　ラティルは、自嘲気味に肩を落として見せた後に、気を取り直した面持ちで歩みを進めた。

そうやって、皆でとりとめもない話を交しながら大通りを北上していた一同は、大通りと同じ程の幅をした白石の階段に辿り着いた。長く長い石段を昇った先に、見上げるばかりに巨大で荘厳な雰囲気^{を湛える}白亜の建造物が聳え立っている。

その建造物こそ、セオミギア大神殿……彼等が向っていた目的の場所である。

第三章：大神殿への道行（後書き）

またしても、説明回にならない話に……

次回は、もう少し物語が動くと思うのですが……

ご意見・ご感想を頂けたら幸いです。

第四章：大聖堂での出会い

さて、ティアス達がセオミギア大神殿に到着するより、些か時を遡った所に話を移そう。

そこは、都市セオミギアの南東に当たる一角に建つ巡礼等を相手にした宿の一室……

宿屋としては、安い値段ながら清潔な敷布で覆われた寝台から、一人の少女が起き上がる。

「ん〜ん……今日も良い天気……」

そう少女は呟くと、寝台を降りて部屋の一角に掛けてある長衣を手にとった。それは白地に灰色の縁取りが施された神官衣に似た意匠の長衣　神殿学院生徒の制服である。

「何とか、入学式の日間に合って良かった。折角、お父様やお母様が送り出してくれたのに、入学式に遅刻したなんて報告をしたら、申し訳ないものね」

そんなことを呟きながら、少女は手にした制服に袖を通して行く。一通り制服を身に纏った彼女は、備え付けられた鏡の前に、寝癖の付いた赤毛の髪を梳ったり、制服の襟元に付けられた飾り紐の結び具合などを調整したりと言った身繕いを始める。

「……うん！……これでよし、っと……」

一頻りそんなことをした後、自分の格好に満足した少女は、軽く頷いて寝台傍の卓に置かれた鞆を手に部屋を飛び出した。

急いで朝食を食べて、早めに神殿へ向かおう……そんなことを思いながら少女　ニケイラ＝ティティスは食堂のある一階への階段

を駆け下りて行つた。

十 * 十

セオミギア大神殿に到る長い石段を昇つたケルティス達は、見事に磨き上げられた石が敷き詰められた回廊を進む。

その回廊を進んだ先に、開けた空間が広がった。

そこは数百……いや、千を超える人々を収めることが適う敷地に、それが座れるだけの長椅子が並び、並みの木々では届かぬのではないかと思える程にその天井は高く、天井・壁面・柱・床の全てが磨き抜かれた白大理石で造り上げられている。

その天井の明り取りも兼ねたステンドグラスや、壁面の各所に設置されたレリーフは、聖霊などの“知識神”の眷族をモチーフとした物が巧妙に配置され、華美と感じさせぬ程度にその神秘性と荘厳なる雰囲気演出している。

そこは大神殿中央に位置する大聖堂、一般信徒の訪問が許される最奥部と言える場所でもある。

ちなみに、この大聖堂は大神殿のほぼ中央に位置しており、ここから神殿各所へ放射状に回廊が広がり、各院の主要な施設と繋がっている。そこに、回廊同士や施設間を繋ぐ細々とした通路が配された構造は、一見すると蜘蛛の巣のそれに似た物となっている。

そして、この大聖堂の正面最奥に鎮座するのが、椅子に座する妙齡の女性の像である。

その大きさは人のおよそ十数倍……

その身は賢者の好む質素な長衣を纏い……

長い髪を水の流れの如く流し……

左手に開かれた書を持ち、目はその書を眺める……

右手はその身の丈程もある杖を持ち

聖蛇エルコートル……

その杖には杖よりやや長い一頭の翼ある蛇が巻き付いている。

この像こそ、過去と記録と魔術を司るとされる女神、“知識神”
ナエレアナの神像である。

* * *

大聖堂に到着した一同は、女神像に向って深く頭を垂れ、“知識神”への祈りを捧げる。

そうして祈りを捧げた後、頭を上げたティアスに残る一同に向けて声をかけた。

「それでは、私は書院へと赴くことにします。皆んな、しっかり勉強に励むですよ。」

ラティル、皆のことを頼みますね」

「はい、お任せ下さい、書院長」

ティアスの言葉に、ラティルが頷きを返して答える一方で……

「お祖父様、今日は新入生相手の入学式と、始業の挨拶ぐらいで終るから、講義とかはないんだよ」

レイアは、祖父の言葉に軽い口答えの様な台詞を返して見せる。

そんな孫の様子に、怒った様子を見せることなく、ティアスは微笑んで言葉を続けた。

「そうでしたね……でも、年も変わり、新しい師や友人と出会える機会もあるでしょう。」

良い出会いがあると良いですね」

それだけを言うと大聖堂の奥　北西の方角に位置する一隅にある扉へと向かって歩き去った。

その扉の向こうには、神殿書院長の執務室がある一角へ続く回廊がある。

ふだんなら、彼と同じ扉に向う筈のラティルは、暫し彼を見送った後で残る三人の子供達に向って声をかけた。

「それでは、私達も学院へと向かいましょう」

「……はい!」

各々、元気の良い返事が彼女の耳に届いた。

*
+
*

セオミギア大神殿は主に九つの区画に区切られており、各々が法院・書院・施政院・祭事院・魔法院・学院・薬院・戦院・雑務院の名で呼称されている。

各々の院を統括するのがそれぞれの院の名を関する院長であり、彼等九人の院長の長を務めるのが、“知識神”ナエレアナを奉ずる^{最高司祭}教団の長を兼任するセオミギア大神殿法院長である。

各院は、その名が示す神殿内での様々な役割を分担して行っている。

その中であつて、“セオミギア大神殿学院”の役割は、端的に言うてしまえば“学究の府”となるだろう。

“大神殿書院”や“大神殿魔法院”……そして“大神殿薬院”も、ある意味で研究機関としての機能を担う院として存在している。

しかし、“大神殿書院”は歴史に関して、“大神殿魔法院”は魔法 特に帝国魔法に関して、そして“大神殿薬院”は医療に関して……と、それぞれの院が担う物事に関連する研究に専門化している。

対して、“大神殿学院”におけるそれは、広範で多種多様な物事に関する様々な研究がなされている。また、広範な研究を行っていることを利用して、他の院や神殿外の研究機関との共同の研究を行う場としての役割も担う例も見られる。

そう言った面から、セオミギア王国を中心とした大陸西方域ユロシア地域北部における最高の研究機関としても名高いものとなっている。

しかし、それだけが“神殿学院”が担う役割ではない。

それが教育機関としての役割である。“神殿学院”に所属する神官達は、学者としての高い見識を有する者達であり、「人々に様々な知識を授けた」と伝えられる“知識神”ナエレアナに倣って人々に、その知識を伝授することを期待されてそうだったのだと思われる。

その為、“神殿学院”の区画の半ばは研究機関としての色の濃い施設が並ぶ物となっているが、残る場所には都市や周辺に住む青少年に様々な知識を教育する為の施設が並ぶこととなっている。

現在、“大神殿学院”の学舎は、初等部・中等部・高等部・大学の四つに分けられ、それぞれの年齢や学力に合わせて、様々な授業や講義が行われている。

*
+
*

そんな神殿学院の学舎へ向かおうと、一同を促したラティルの“虹色の瞳”は、とある人影の姿を捉えた。

「……………あれ？」

「……………何、母様？」

「……………如何したんですか、父様？」

ラティルの呟きに彼女の方を向いた子供達は、次の瞬間には彼女の視線の先へと頭を巡らせた。そんな一同の視線の先に、一人の少女の姿が映ることになる。

その少女は、ラティル達が大聖堂に着いて若干の時を空けて後に大聖堂に到着したように窺えた。しかし、学院学舎へ続く扉の位置が分からないらしく、大聖堂の壁際を困惑気味に右往左往していた。間の悪いことに、まだ朝も早い部類に入る時間帯で、神殿に詰める神官の何人かは聖堂に入ってくるもの、学院生徒らしい人影は見受けられない。お蔭で、どの扉を入れば良いのかの見当が付けられずにいる様だった。

少女の様子を見てフォルンとレイアが声を交す。

「……新入生……かな？」

「じゃないのか？……見慣れない顔だし、制服が着慣れてない感じがする」

「道に迷っているみたいだしね」

「適当な扉を入って、適当に進めば、学舎に辿り着けるってのに……」

そんな二人の会話に頭上から声が降りて来る。

「大神殿の回廊は、蜘蛛の巣状に配置されていますからね。慣れない者が、下手な角を曲がれば、何処とも知れぬ場所に迷い出てしまいますから……無闇に入らないのは正しいと思いますよ」

「そうなんですか……？」

割り込んできたラティルの言葉に、ケルティスが短い問いで聞き返す。するとラティルは、少しばつが悪いと言った苦笑を浮かべて答えを返した。

「……若い頃に、うっかり迷ってしまったことがありましたからね」

「……そうなんだ……」

「……つと、いけない。迷っているなら案内してあげないと……」

ケルティス達の方を見詰めていたラティルは、慌てて戸惑う少女の方へと小走りに駆けて行った。当然、ケルティス達も彼女の後に続く。

ラティル達が近付いてみると、やはり少女は道に迷っているらしく、不安に深緑の瞳を潤ませ、長い赤毛が乱れるのも気にせず、あちこちへと首を振り回していた。

そんな様子を見せていた少女は、やがて近付いて来た女性　ラティルの姿に気付き、近づく彼女達へと縋る様な視線を投げかけて

きた。少女の視線を受けたラティルは、少女へと微笑を浮かべて声をかけた。

「……お嬢さん、何かしましたか？」

「あ、は、はい……あの………」

「もしかして、道に迷ってしまったのですか？」

「は、はい！……えっと………」

恥らつてか口籠もる少女から、思った通りの答えを聞き出したラティルは言葉を続ける。

「それなら、私達と一緒に行きましょうか？」

私達はこれから学院学舎の中等部へと向かうのだけれど……」

「！……ぜ、ぜひ、お願いします！」

ラティルの申し出に、少女は一も二も無くと言った様子で答えを返した。

「分かりました。それでは、往きましょうか」

その答えに小さく頷き返してラティルは短く言葉を紡いで歩き始めた。そして、大聖堂の西側にある扉の一つ　神殿学院へと続く扉を開いて、その先の回廊へと歩を進めて行ったのだった。

* * *

回廊へと入って間もなく、少女はラティルに向けて声をかけた。

「あ、あの……ありがとうございます。私……ニケイラ＝ティティスと言います」

「どう致しまして、ニケイラさん。私はラティル＝コアトリアと申します。学院の新生生ですか」

「は、はい……今年から大神殿学院の中等部に入学する為に、ランギアから来ました」

その答えにラティルの目が感嘆の思いから細められる。

ランギアと言えば、大陸西方域都市国家 ユロシア地域の北東部に位置する“狩獵都市”の異名を持つ国家である。大陸西方域ユロシア地域の諸国家からの“大神殿学院”への留学生は珍しくないとは言え、それ程多いとも言えない。

そんな多くはない一人として、この場所へとやって来た少女に、
ラティルは感心の想いが湧き上がっていた。

そんな二人の間に、その後を歩んでいた者達より声がかかる。

「新入生か……あたしは、中等部二年のレイア」コアトリアだ。よろしくな！」

「同じく、僕はフォルン」コアトリア……ここで出会ったのも何かの縁だし、困ったことがあったら、良ければ相談に乗るよ」

「ニケイラ」ティティスです。よろしくお願いします……レイアさん、フォルンさん」

「ああ、よろしくな………そうだ！」

少女 ニケイラへは、自分に声をかけた姉弟へ向けて、勢い良く頭を下げる。

その様子に満足気に頷きを返したレイアは、思い出した様に頭を上げ、自分達姉弟の後ろで隠れる様に立っていたケルティスの肩を掴んで、自分の前へと突き出した。

「こいつは、ケルティス」コアトリアって言うんだ。こいつも今年から中等部に入學するんだ。良かったら、友達になつてやってくれ」
「は、はい………よろしくね、ケルティス君」
「え、っと……ケルティスです。よろしくお願いします、ニケイラさん」

ニケイラとケルティスは互いに歩を止め、向かい合って言葉を交す。

そこで始めて、ニケイラの瞳が大きく見開かれる。少女の視線の

先は、向かい合う少年　ケルティスの頭へと釘付けになっていた。どうやら、その髪の色に気付いて、彼等の正体を思い付いた様であった。

「……コアトリア……って、もしかして……」

「ん？……ああ、まあ、予想した通りだよ……多分」

驚きに強張った口調のニケイラの問いかけを、呆気ないまでに平然とした調子でレイアは答える。

そして、彼女は少女に向けてニヤリと口元を歪めて言葉を繋げた。

「……でも、まあ、そんなに気にする様なもんでもないからさ」

「……はあ……そう、ですか……」

レイアの言葉に、少しばかり緊張を解けたのか、ニケイラは長く一息を吐いて肩を僅かに落とす。

「それでは、学舎の方に向かいましょうか？」

そんな子供達の遣り取りを黙って見詰めていたラティルは、一段落したと察して皆へと声をかけた。

「はい、母様」

「はい、父様」

「はい、ラティルさん」

ケルティス達が一斉に返事をし、一拍遅れて返事をしようとニケイラはラティルへと向き直る。改めてラティルと顔を合わせた少女は、再び驚きに目を見開く。

「……“虹色”の、瞳……って、もしかして……」

「どうしたんです？……ニケイラさん？」

再度、驚きに硬直してしまった少女に、ラティル達は首を傾げる。

そんな彼女に向けて、回廊に響き渡る様な大声を張り上げた。

「……………“西のヤーナ”……………！」

「……………？……………」

叫びを上げたニケイラの言葉に、子供達三人は意味が分からず、再び首を傾げることになった。

第四章：大聖堂での出会い（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。

今回は尺の都合から、予定の途上ながら、切の良いここまでで切り上げることになりました。

ニケイラの叫びの意味は、次回にて……

第五章：異名の由来

ニケイラの叫びに首を傾げるケルティス達に対して、ラティルはその言葉を聞いてピタリとその身を硬直させた。

そして次の瞬間には、彼女は顔を形容し難い渋いものへと歪めることになった。

「……………西のヤーナ」……………」

驚きと感激に深緑の瞳を潤ませるニケイラと、“虹色”の瞳を持つ目元や口元を引き攣らせるラティル……

その両者を交互に目をやりながら、ケルティスは少女　ニケイラが発した言葉の意味を吟味しようと頭を捻った。

*
†
*

“ヤーナ”とは、ロシア大陸
高位聖霊北方大陸北部域　ヤヌガリア地域に暮らす諸民族の祖として崇められる女神の名である。

第一紀
上位神仙神代の頃にあつて、彼の女神は弓と鋸を巧みに操る勇猛な女傑であつたと伝えられ、狩猟と漁撈の女神として北方大陸で広く崇拝されている。その為、ヤヌガリア地域の貴人や武人の家系では、この女神の名にちなんだ名を与えられている女性が時に見られると聞く。

そんな女性達の中でも特に有名なのが、“大ヤーナ”と“小ヤーナ”の名で北方大陸史に残る二人の女傑である。

“大ヤーナ”と称される女性は、古代紀 第二紀 ユロシア魔導帝国黎

明期にあつて、ヤヌガリア地域へと侵攻した魔動帝国の帝国軍に対して、起ち上がったヤヌガリア諸民族のある族長家の娘であつたと伝えられている。

彼女は物陰に潜んで侵攻軍に近付き、自らの放った一箭によって、軍中央に在つた侵攻軍の大將を一撃の下に射抜いて帝国軍を瓦解させ、帝国の侵攻軍から大陸北方域を守つたと伝えられている。
ユロシア魔導帝国 ヤヌガリア地域

一方で、“小ヤーナ”と称される女性は、古代王国崩壊後 第三紀 ミナル帝国黎明期にあつて、大陸北部域に成立して間もないヤヌガリア王国へと侵攻した帝国軍に対して、撃退の任を負つた王国軍の將軍の一人であつたと伝えられている。

彼女は、帝国と王国を隔てる山岳地帯の峠道の一つに陣取つて侵攻軍を押し止め、遂には自らの放つた遠矢の一箭によって、侵攻軍で陣頭指揮を執つていた帝国建国帝でもあつたラルグタス一世に致命傷を与えて、帝国軍を撤退に至らしめたと伝えられている。
眠れる丘陵

これらの逸話は、大陸北部域では広く知られる伝説であり、大陸 ユロシア地域 ミッドリア地域 西方域や大陸中原域でも少なからず知られるものとなっている。

特に大陸北部域においては、“大ヤーナ”と“小ヤーナ”の二人の女傑は“ヤーナ女神”とも同一視され、“勝利の女神”としても崇拜されている。
ヤヌガリア地域

それに伴い、大陸北部域では、戦の勝敗を決する機会や要素を指して“ヤーナの矢”と呼ぶ言い回しや、勝敗が決する瞬間を指して

“ヤーナの矢が放たれる”と言う慣用句などが存在している。

*
†
*

しかし、そんな“ヤーナ”の名がこの場で飛び出す訳は、ケルテイスには分からぬままだった。

だが、そんな周囲の様子に気付いたこともなく、ニケイラはラテイルに熱い視線と言葉を放ち続ける。

「……このセオミギアに来たら、もしかしたら逢えるかもって思っていたのに、こんなに早くお逢いすることが出来るなんて……！これはもう、ナエレアナ女神様とヤーナ女神様に感謝、感激っ所ですよね！」

「……………あの……………」

「早速、さっきの大聖堂でお礼のお祈りしないといけないかなって

……………

……あ、でも、これから学院学舎で入学式があるんですた。

あ、そうだ、放課後に行けば良いんですよね」

「……………ニケイラ……………さん……………」

「そう言えば、これから中等部に行くんですけどよね？
だったら、これからの学院生活で一緒にいられるってことなんですか？

学院で一緒ってことは、学院の講師なんですよね？

……ラティル先生……うん、素敵です！

ラティル先生の講義なら、欠かさず出席して見せます。

やっぱり、“西のヤーナ”とまで呼ばれた人の授業と言ったら……

……」

「……あの、ニケイラさん……」

のべつまくなしに捲くし立てていた少女の言葉の隙を突いて、ラティルは言葉突き立てることに何とか成功する。その割り込まれた言葉に、ニケイラは少しばかり熱が冷めたのか、一つ瞬きをして言葉を途切れさせた。

「……なんでしょう……？」

「あの……どうして、“西のヤーナ”って名前を知っているの……？」

「え？……あ！……そうか、まだ言っていなかったですね。

私の父は、ランギアランギア王国騎士団の緑風騎士団の騎士なんです。あの“大挟撃戦役”に従軍していたんです。

それで……それで……あの一閃を目撃したんです。私は、父からいつもその時の話を聞いて育ったんです」

「……あ……そうなのですか……なるほど……」

目を輝かせて答える少女の言葉で、ラティルの洪面を浮かべた表情に何処か納得した色が混ざる。

しかし、先程の問答で納得したラティルに対して、子供達三人は

いまだ“西のヤーナ”の異名に関する疑問は依然として不明のままである。ともあれ、何となく察することのできる事柄は幾つかある。

「……“西のヤーナ”って……ラティルさんのことなんですか……？」

そうした察せられる事柄の確認にと、ケルティスは問いの言葉を紡ぐ。

「ええ……“西のヤーナ”と言えば、ヤヌガリア地域大陸北方域で広まっているラティル先生の呼び名よ。何と言つても……！」

ケルティスの問いかけに、力を入った声で答えを返す。しかし、そんな少女の言葉を遮る様にラティルの言葉が被さる。

「……さ、さあ、時間に余裕があると言っても、まだ目的の中等部学舎まで到着してないし……お喋りもこれ位にして学舎へ向かいましょう、ね？」

そう言つて、強引に歩を進めようとしたラティルの背後で、別の声が飛び出して来る。

「だったら、歩きながら話を聞こうぜ。なあ、フォルン……？」

「うん、父様のことだし、ちよつと興味があるよね」

「……………」

レイアとフォルン
我が子達から飛び出た思わぬ台詞に、後続の子供達へ見せぬ様にながらも、ラティルの表情にまた微かに渋いものが混じることになる。だが、話を止める道理を思い付けずに、背後の会話を心の裡で耳を閉ざすことにして回廊を進むことにしたのだった。

* * *

回廊を進みながら、少女　ニケイラは嬉々として、父から聞かされ続けた一大活劇を身振りや手振りを交えて三人の少年少女に向けて語り始めた。

「レイアさん、フォルンさん、それにケルティスさん……皆さんは、“大挟撃戦役”と呼ばれる戦のこと、知っていますか？」

始めに問われたその内容に、三人が三様に承知の頷きを返す。

“大挟撃戦役”の通称で知られる戦役とは、レイアたちが生まれる以前……今より十数年昔に行われた戦争を指している。

ユロシア地域大陸西方域の諸国家連合と大陸中原に広がる大帝国内ミッドリア地域ロミナル帝国の間には、それぞれの国家が成立して以降、幾度となく大小様々な紛争や戦争が繰り返されている。

それは、ロミナル帝国が大陸統一を求めて大陸各地へと侵攻の魔手を伸ばす中で、それに対抗する為に大陸西方域の諸国家は“ユロシア地域ユロシアの盟約”の名で知られる大同盟を締結した。そうして、両者の激突は度々激突を繰り返すことになっていたのだ。

“大挟撃戦役”は、そんな両国の間で交わされた戦争の一つである。

この戦役にはセイシア・レインの母娘のみではなく、ティアスやラティルも参戦していたこともあって、ケルティス達三人も折に触れて耳にする機会があった。

「私の国　ランギア王国は、大陸西方 ユロシア地域の中でも北西にあつて、ロミナル帝国が侵攻する時も、騎士団主力が帝国と接するシルダリー王国へ派遣するだけで、直接戦に巻き込まれることはなかったんです。」

でも、この戦いの時には、緑風騎士団の主要な騎士の方々がシルダリーへと出立された後に、隣国のガリシア王国から大軍が攻め寄せて来たんです。」

この点が、この戦役が“大挟撃”の異名で知られる由縁である。
ロミナル帝国がヤヌガリア地域大陸北方域の国家との脅迫染みた同盟関係を築いた上で、ユロシア地域大陸西方域の北東部と南東部の二方向より攻め寄せたのである。

「残された緑風騎士団の方々と言えば、国境警備と治安維持の為に数部隊と見習いの騎士達くらいしかなかったんです。」

これがロミナル帝国の狙いであつた。

“ユロシアの盟約”を締結した諸国家が想定していた敵国とは、基本的にロミナル帝国のみであり、ヤヌガリア地域大陸北方域の諸国家に対する警戒は全くない訳ではないものの、仮想敵として設定していない傾向にある。

それは、ヤヌガリア地域大陸北方域の諸国家もユロシア地域大陸西方域の国家群と同じく、ロミナル帝国とは敵対的な傾向にあつたことにも影響している。

「でも、そんなロミナル帝国の策略は、我らが盟約軍の名軍師！……“仮面の魔導師”ルギアス様には全然、全くお見通しだったんで

す！」

そう力説するニケイラの様子に、三人は微妙な苦笑を漏らす。

少女が語るのは、“仮面の魔導師”や“大陸西方最高の軍師”との呼び名も高い人物　ルギアスⅡペンコートルのことである。

しかし、若き日の彼はティアスとは喧嘩友達……と言うよりも、口論友達の様な間柄であつたとセイシアが度々口にしていたこともあつて、コアトリア家の者達には、そんな印象の方が強い。

「ルギアス様の命で、セオミギア騎士団 白牙騎士団やマイニリー騎士団 岩爪騎士団、それにテクノキア騎士団 錬刃騎士団やノステイディア騎士団 暗牙騎士団の騎士達が、密かにランギアの都に集結していたんです。

攻め寄せるガリシア王国軍に、集まつた連合騎士団の方々が立ち塞がつたんです」

もつとも、ガリシア王国よりの侵攻軍に相対した連合騎士団は盟約軍主力ではなく、後方支援を主任務とする予備部隊の集合であつた。そのことをケルティスは、とある事情もあつて知っている。

白牙騎士団・岩爪騎士団及び錬刃騎士団の主力部隊はシルダリー王国へと派遣されており、セイシアⅡコアトリアもシルダリー側の戦線に参戦していた。

一方で、レインⅡコアトリアは少女の話にあるランギアに派遣された部隊として参戦していた。

そんなことをつらつらと思い出していたケルティスの耳に、更に熱を帯びたニケイラの声が流れて行く。

「侵攻軍と盟約軍との激突は、一進一退の膠着状態に陥ったそうです。でも、その時……！」

戦場の上空を切り裂く光が走ったんです！」

「………光………？」

熱っぽく声の調子を上げたニケイラの言葉に、レイア達は思わず問いかけの言葉を漏らす。

「ええ、光です！」

戦場の上空を、都市ランギアの物見の塔の一つから、東に向かって、落雷の如き閃光と轟音を振り撒きながら、一直線に走ったんです。

そして……そして、その光は戦場を通り抜けて……ガリシア王国軍の本陣に掲げられた大軍旗の支柱をへし折ったんです！

大人が一抱えする程の……

太さをした支柱を……

戦場を隔てた遠い距離から……

一撃で……

へし折ったんですよ！」

話をすることで感極まったのか、頬を紅潮させて力の籠った声で、少女はそう言い切った。そんな少女の様子に、引き込まれる様に三人は次の言葉を待つ。

「……それで……大軍旗は、凄い物音を立てながら倒れ落ちたそうです。

その様子は戦場の何処からも判る程の出来事で、ガリシア軍はたちまちの内に崩れ去り、ガリシア王国へ逃げ去って行ったんです。

それで……戦場の上空を走った光こそが、ラティル先生の放った銃弾だったんです！」

そう言った少女の言葉に、レイア・フォルンの姉弟は驚いて親であるラティルの方へと首を巡らす。しかし、そんな子供達の視線を気付かないかの様に回廊を進み続ける。

そんな彼女を横目に、ニケイラは少し調子を落として言葉を続けた。

「戦場を走った光は、侵攻軍・盟約軍の誰もが目にした光景だったんですけど……最初は、誰が撃ったか誰も判らなかったそうです。

でも、戦役が終わった後でラティル先生が撃ったことが判って、ランギアで評判になったんです。それが、大陸西方域和平が成立した後にガリシア王国にも伝わって、“ヤヌガリア地域クロシアにいるヤーナの化身”と凄く評判になったんです。

それで、ヤヌガリア地域大陸北方域やランギア王国では、“西のヤーナ”って言えば有名なんですよ」

「……へえ……そうなんだ……」

「……………」

ニケイラの話が終わった所で、聞き入っていた三人は改めて前を進む女性の背に視線を集めた。

しかし、視線が集まっていることを承知しているだろうに、ラティルは素知らぬ素振りです。そのまま回廊を歩いて行く。

*
十
*

ラティル^{II}コアトリア……旧名をラティル^{II}ウィフェルと言うこの人物は、“虹の一族”として婿入りする以前より、大陸^{コロシア地域}西方域において、ある程度名の知れた人物である。

それは、ティアスより、古代紀の西方大陸^{アティス大陸}において用いられていた魔法機械武器　銃と呼ばれる武器を贈られ、北方大陸^{コロシア大陸}唯一の銃の使い手として、まず名が知られることとなった。

そんな彼は、銃と言う武器に適性を持っていたのか、様々な武勇伝を残すことになる。

曰く、乱戦の最中、入り組んだ味方達の隙間を縫う様にして一発の銃弾を打ち、一撃の下に魔獣を屠った……

曰く、十数発の銃弾を叩き込んだ筈の一つの的に、たった弾丸一発分の穴しか穿たれていなかった……

曰く、剣豪と名高いジェイナスに対して、互いの得物^{銃と剣}を用いた一騎打ちを行い、接近戦による銃撃と斬撃の応酬を繰り広げて、ジェイナスの剣を叩き折って勝利した……

曰く、乱戦で敵味方が入り乱れた最中、その乱戦の中に銃弾を打ち込んで、味方を襲う敵方の得物を尽く弾き飛ばした……

眉唾にも思える様々な噂が囁かれているが、上記の噂などについては本人やコアトリア家の面々も否定はしていない。そんな彼には、“銃使い”や“剣撃ち”と言った異名で呼び習わされている。

一方で、女性異相体の姿を得たことで、女性時には本来の姿の時よりも高い魔力や魔法の才と“虹色”の瞳を有することとなり、“虹の瞳”の異名を持つ女性魔術師としても名が知られている。

*
十
*

黙したまま数歩進んだラティルは、やがて歩を止めた。

そこは、学院中等部の学舎が並ぶ区画にある広場……中等部の学院生徒が、憩いの場や交流の場として利用する為の場所である。そして、生徒達への伝言等を貼り出す為の掲示板も設置されている。

その掲示板には、何事か書き出された大きな紙が何枚か張り出されている。それらの紙を認めて、レイアが声を上げる。

「お！……もう学級クラスの組分けの表が張り出されてる。

フォルン、それにケルティスとニケイラ！……早速、見に行こうぜ」

「そうだね、姉さん。二人とも、どの組に配されるか、一緒に見に行こう」

「……………は、はい……………」

そう言っ、て、掲示板へと駆け寄る“虹髪”の姉弟の後を、ニケイラは慌てて追いかける。

そんな三人の様子を見ながら、少し気になったケルティスは、彼女等を追わずに広場の入口に佇むラティルを見上げた。ケルティスが見上げたラティルは、掲示板へと駆け去る三人の後姿を見詰めながら、少し躊躇いがちに小さな呟きを溢す。

「…… “西のヤーナ” と言う異名…… 私は好きではないんです。
ヤーナ女神は“智慧神” ソフィクト神の眷族で、大・小ヤーナの
二人とも同じく“智慧神” ソフィクト神の信徒……
対して、私は“知識神” ナエレアナ女神の信徒であり、広義には
“虹翼の聖蛇” エルコアトルの眷族の末席に数えられる存在ですか
らね。」

それに私は、女性の姿で魔力銃を撃つことはありませんから……」

その眩きを溢すとともに、ラティルは、ケルティスを含めて、そ
の場にいる少年少女が知らない事実¹に思いを馳せる。

“剣撃ち” や“虹の瞳” と言った異名が、彼女 ラティルの行
った功績や容姿から自然と広まったものであるのに対して、“西の
ヤーナ” はそうではない。

ニケイラは自然に流布したと思っている様子であったが、実際の
所は“仮面の魔導師” の異名で名高いルギアス²ペンコアトルの策
略の結果なのだ。

“ヤーナの矢” とは勝敗を決する一撃…… と言う意味合いととも
に、「侵略と言う悪」を誅伐する「正義の一撃」³ と言う意味合いも
含まれている。

射撃の名手であり、女性としての姿を有するラティルを伝説のヤ
ーナと関連させることで、先の戦いのヤヌガリア諸国側の非道を印
象付け、以降⁴ ユロシアへの侵攻の意思を削ぐ⁵ 為に、⁶ 闇風騎士団や詩
琴騎士団の特務騎士を用いて意図的に大陸北方域で流布させたのだ。

ルギアスより、この策略のことを耳にしたが故に、彼女はこの異
名により複雑な思いを抱かずにはおれなかった。

しかし、このことで入学と言う晴れの日を迎えたケルティスやニ

ケイラに水を差す訳には行かない。

そう思いつつ、物思いから我に返った彼女は、心配そうに自分を
見上げるケルティスの姿を目にして、自分の目論見が些か失敗して
しまったことに気付いたのだった。

第五章：異名の由来（後書き）

ニケイラ嬢のマシガントークが炸裂……何故かこうなっていました。

更に、全体としても、調子に乗って書き進めていたら、予想以上（予定以上）に長くなってしまいました……（苦笑）

よろしければ、ご意見・ご感想が頂けると幸いです。

第六章：青い髪の少女

心配な面持ちのケルティスと、少し困った様子のラティルは暫しの時、互いを見詰め合う。

そんな二人の背後に、何者かの気配が現れる。

「……………！」
驚きに大仰に振り向いた二人の眼前には、一人の少女が立っていた。

「……………これは、失礼を致しました」

ラティル達の反応に、一瞬身を硬くした少女は、次の瞬間には謝罪の言葉とともに頭を垂れる。

「……………い、いえ……………こちらこそ、驚かせてしまったようで、すみません」

頭を垂れる少女に向けて、ラティルは謝罪の言葉を返す。その姿に慌ててケルティスも頭を下げた。

「それでは、失礼します」

互いに下げた頭を上げると少女は、二人に向けて軽く会釈した後、レイア達が騒ぎながら覗き込む掲示板の方へと歩み去って行った。

「……………」
ケルティスは何処か呆然とした様子で、歩み去る少女の背中を黙って見送った。

ケルティス達の傍らを通り過ぎた少女は、何処か不思議な雰囲気を感じさせていた。

年の頃は十歳前後で、纏う衣服は学院生徒のそれであり、ケルティス達と同じく学院中等部の生徒と思われた。色鮮やかな紺青から毛先に行くに従って薄青色に移り変わる不思議な色合いを持つ長い髪を持ち、セオミギア王国では然程多くはない小麦色の肌をしている。

それに加えて、その瞳は髪の色に負けぬ深い紺青にして、顔立ち
は十人中十人が美少女と呼ぶだろう程に美しく整っている。その容
姿は、人目を惹き付けるに充分な要素を備えていると言えるだろう。
だが、それだけでは、少女の印象を言い表すには不足気味に思わ
れた。それは妖艶さと淑やかさが調和した麗しさと言う女性的な魅
力を、この少女が歳不相応な程に纏わせていたからだ。

少女の纏う雰囲気は、ケルティスに、母に当たる女性　セイシ
アのことを想起させた。彼女は女性的な妖艶さと男性的な精悍さを
共存させた魅力を備えた人物である。そんな彼女は、戦場の様な騎
士として立つ場においては、その精悍さや凛々しさが際立つ武人と
しての雰囲気纏う反面で、社交の場の様な貴族夫人として立つ場
においては、妖艶さや麗しさの際立つ美女としての雰囲気を纏わせ
ており、異なる場面で全く違う面を垣間見せると言う印象がある。

ケルティスが見詰める青き髪の少女は、そんなセイシアが女性と
してみせる嫣然とした雰囲気にしたものをその身に纏っている様に
感じられたのだ。それは、姉に当たるレインや女性時のラティルで
も身に帯びていないものであったから、余計にケルティスの目を惹
き付けることになっていた。

何処か呆然として、青い髪の少女の背を見詰めているケルティス
を、ラティルは暫し見下ろす。そして彼女は、ケルティスへと声を

かけた。

「……ケルティス君、君も組分けの表を見に行ってみたら如何ですか？

私はこれから、講師詰所に向かいますから、教室へはレイア達に案内して貰って下さいね」

そう言くと、彼女は少年の肩を叩いて、掲示板の方へと促した。

彼女の声に応える様に、小さく頷いて、ケルティスはレイア達の傍らへ向かって歩き出した。

* * *

ケルティスを送り出し、その背を見送っていたラティルは、少し視線をずらして青い髪の少女の姿を捉える。彼女の異名の一つの由来 その目に輝く“虹の瞳”は、常人に捉えられぬモノを視界に捉えていた。いや、常人のみならず、並みの神官でも視界に捉えるのは困難ではなからうかと思われる。

そんなことを思う彼女に、軽い調子の声が降りて来る。

『……聖霊……それも夢幻神の眷族ですか……』

その声に振り返った彼女の目には、自身の傍らの虚空に漂う一人の人物が映っていた。派手な意匠に飾られた鍔広帽にマントを纏い、その手に豎琴を抱えたその姿は吟遊詩人のそれである。しかし、その背には薄緑色に輝く二対四枚の翼がマントの脇より拡がっている。

彼の名はリュッセル……かつて西方大陸（アティス大陸）にて吟遊詩人として活躍したと言う人物であり、死後昇天して知識神の眷族たる聖霊の一柱となっている。そして言葉を付け加えるなら、彼はラティル＝コアトリアを生涯に亘って見守る役目を負った守護聖

霊でもある。

自らの思った事柄を、自身の守護聖霊に告げられたラティルは、虚空に浮かぶ彼に向けて言葉を漏らす。

「……夢幻神の聖霊とは珍しいですね。それに、敢えて、その姿を覆い隠して寄り添うなんて……」

*
†
*

天地を創造した八大神と称される神々は、それぞれに眷族たる千億とも数えられる聖霊と呼ばれる下位神族を従えている。そして、神代の終焉と共に肉体を喪失した神々が鎮座する神霊界と呼ばれる霊的世界にて、彼等聖霊達は暮らしている。

しかし、そんな彼等は、知恵ある生き物の魂として地上界に降り立つて、その一生を過ごすと言われている。ちなみに、そんな地上に降りた同胞を見守る縁深き者が、守護聖霊の役割を務めると言われている。

だからこそ、地上に生まれる人々となる聖霊は、自らを主宰する神と縁深い場所に生まれ出でる傾向にある。そして、セオミギア王国は、文字通り“知識神”ナエレアナ女神のお膝元の地であり、一方で“夢幻神”イーミフェリア女神の鎮座地は、遙か彼方の南方大陸にある。そうしたことを踏まえれば、夢幻神の守護聖霊を伴う人物がこの国にいること自体が比較的珍しいことと言えるだろう。

しかし、それだけなら驚く程珍しいとは言えない。例えば、セイシア・コアトリアの守護聖霊を務めるのは“戦神”ミルスリード神の眷属たる戦乙女の一柱である様に、北方大陸西域ユロシア地域とは言え“知識神”ナエレアナ女神とは異なる神の守護聖霊を持つ者も多くはない

ものの少ない訳ではない。

だが、守護聖霊は、普段から常に守護対象たる庇護者の傍にいる訳ではない。時に神霊界より見守り、時に庇護者の縁者・友人を見守る。多くの人々にとつて、守護聖霊を視認することが出来ぬこともあつて、常に寄り添い、助言や忠告を与えらるゝという訳には行かないからだ。

むしろ、庇護者へ重要な直感を与え、邪霊の誘惑を退け、異なる神霊の眷族たる聖霊による過剰な干渉を妨げる等と言つた、常人の目に触れず、気付かれることもない役割を果たしていることの方が多い。これらの役割は、通常は神霊界においてなされ、余程の状況でない限り地上界に直接降り立つことは少ないと言われている。

しかし、そんな事柄にも例外はある。聖霊の姿を見て、聖霊の声を聞くことの出来る者 神官・巫女の素養を持つ者達……特にその素養を秘めた幼子の傍らには、守護聖霊は常日頃より寄り添う傾向が強いと言われていた。

*
十 *
*

『夢幻神は、夢や幻……それに偽りを司る神……他の聖霊に比べても隠行が得意な傾向にあると耳にしますが……なかなかものですね』

「ええ……そうですね。私も女性体でなかったら見逃していたかもしれませんね。」

それにしても、敢えて姿を隠すのは異教の神殿に入ると言つ遠慮からでしょうか？」

『かもしれませんね……まあ、古代の“禁教令”の様に、問答無用

で処刑される訳ではないでしょうが、気付いた神官達の機嫌を悪くすることもありますからねえ」

しかし、それでも敢えて聖霊が傍にいろってことは……興味深いですよえフェルン大陸

古代の南方大陸あったミノログ帝国で布かれていたと伝わる悪法を例に揶揄する様に語るリュッセルは、興味深げに青い髪の少女を見詰めていた。

しかし、少女を観賞し続ける暇がある訳でもないラティルは、程なくして広場を退出して講師詰所に続く回廊へ徒歩を進めたのだった。

* * *

一方で、掲示板へと向かったケルティスは、組分け表を前に喜色に賑わうレイア達の下に辿り着いた。

先程すれ違った青い髪の少女は、掲示板を一見してすぐに立ち去ったらしく、その姿は既に見られなくなっている。しかし、レイア達はケルティスのことを待っていたらしく、一同が近づく彼を見詰めていた。

「来たな、ケルティス！……喜べ！」

お前とニケイラが一緒の組になつてゐるぞ！」

「改めて、よろしく願いますね、ケルティスさん！」

近づくケルティスに、開口一番で喜色が浮かぶ大声をレイアが放つ。そして、レイアに続いて笑顔を浮かべたニケイラの元気の良い声が彼の耳に届く。

その声を確かめるように、ケルティスは掲示板へと目を走らせる。程なくして、その中に自分の名とニケイラの名を見付け、改めて彼女達の方へ向き直る。

「こちらの方こそ、よろしく願いします、ニケイラさん」

そう言っ て互いの手を取り合った。そんな中、その輪から少し下がった場所にいたフォルンが茶化す様に声を漏らす。

「まあ、二人が一緒の組だったのは良かったけど、僕が姉さんと今年も一緒だったって所は、あんまり嬉しくないなあ」

その声に胡乱な目でレイアが振り向く。

「ああ〜ん？……このあたしと一緒の、何が気に喰わないんだ？」

凄みを利かせて睨み付けるレイアに怯むことなく、フォルンは肩を竦めて憚然とした調子で言葉を返した。

「だって、始終授業をサボって抜け出す姉さんのお蔭で、去年はまともに授業を受けることが出来なかったんだよ。姉さんが逃げ出す度に、僕が連れ戻す役を押し付けられて、都市中走り回らされる羽目になってたんだからね。」

また今年も、そんな追いかけてこをしなければならなかったら……ねえ」

そう言っ て、フォルンは同意を求める様に、ケルティスとニケイラを見詰める。

「……………」

その彼の視線に、同意を返すべきか否かと二人は困惑の面持ちのまま互いを見返すことになった。

一頻り騒いだ後、一同は広場を後にして教室の並ぶ学舎の方へ向かうことになった。

まず向かうのは、一年灰組……ケルティスとニケイラが、この一年過ごすことになる学級の教室である。

* * *

広間を出て今までよりも細い廊下を進んだケルティス達は、教室の並ぶ区画へと踏み込んだ。そんな教室が並ぶ廊下を幾許か進み、彼等は目的とする教室 中等部一年灰組の教室の前まで辿り着いた。

「……一年、灰組……っと、ここだな」

「うん、そうだね」

教室の入口の記述を確認し、口々に言葉を漏らすレイア・フォルン姉弟は、後に続く二人 ケルティスとニケイラの方へと振り返る。

「ここが一年灰組だね。それじゃあ、僕達は自分の教室に向かうから……」

「まあ、入学の式典が終つたら、こつちに来てやるよ。学院のあちこちを案内してやるからさ！」

二人 レイアとフォルンはそんな言葉を残し、廊下の奥へと歩み去る。

残された二人 ケルティスとニケイラは、一時歩み去る二人を見送った後、教室の中へと入ることにした。先程通った廊下では、教室に向かう生徒の姿は見受けられなかったこともあつて、二人が教室への一番乗りかも知れないと、少し心躍らせつつ教室の扉を開いた。

「……あ……」

しかし、二人の予想に反して教室は無人と言う訳ではなく、無人でなかったことを驚く二人と不意に入ってきた二人に驚く一人の声は、期せずして同じ言葉を同時に漏らした。

その教室にいたのは一人の少女……先程、ケルティスの脇を通り抜けた青い髪の美少女であった。予期せぬ再会に目を瞬いて動きを止めたケルティスに対して、ニケイラは臆面のない様子で少女に声をかけた。

「……おはよう。私達が一番乗りかと思ってただけ……」

私はニケイラ「ティティス……これから一年、よろしくね」

そう言つて、青い髪の少女に向けてニケイラは右手を伸ばした。

その様子に、青い髪の少女は席を立ち、ニケイラの方へと近寄つて差し出された右手を取つて握手を交した。

「……こちらこそ、よろしくお願いしますね。私はカロネア「フェイドルと言います。」

所で……こちらの方は……？」

ニケイラと握手を交したカロネアと名乗る少女は、ニケイラの背後で呆けた様子を見せるケルティスの方へと視線を移した。自分に視線が移ったことに気付いたケルティスは、数度瞬いてカロネアへと視線を合わす。

「……ケ、ケルティス」コアトリアです。よろしく……」

そう言つてお辞儀をするケルティスに対し、カロネアもお辞儀を返した。

「こちらこそ……コアトリアの姓と、その髪の色……もしや、“虹の一族”の方ですか？」

「え……ええ、そうです」

「それでは、セイシア様のお孫様になるのかしら？」

カロネアの問いに出た名前に、ケルティスは軽い驚きで目を見張る。そして、一拍の間をおいた後、問いの答えを返した。

「い、いえ……セイシアは、僕の義母……です」

その答えに、今度はカロネアの方が驚きに目を見開き、呆然と口を開ける。

「……………お母様……でしたか、それは失礼しました。セイシア様のご子息になるのですね。そんな方と同級生になれるなんて光栄ですわ」

一時の驚きから立ち直ったカロネアは、ケルティスに優雅な微笑を浮かべて言葉を続けた。見る者を惹き付けずにおれない笑みに、微笑を返す。

しかし、そんな彼の視界に、笑みとは違う表情を浮かべる顔が目に入った。それは驚愕の形で表情が固まった様子のニケイラの姿である。硬直している様にも見えるニケイラに彼は声をかけた。

「……………ニケイラ……さん……？」

「あ、あの……私もてつきり、レイアさん達の弟さんだとばかり……」

その言葉に、ケルティスは苦笑を浮かべて言葉を紡ぐ。

「……………実は、あの二人は年上の姪と甥に当たるんです。でも、ずっと年上になるので、僕にとっては姉と兄の様な人達ですよ」

「レイアさんと言うのは、何方のことでしょうか？」

彼の説明の言葉に、今度はカロネアの方から問いの言葉が漏れる。

そうして、ケルティスは自分の家族に関する簡単な説明を二人に述べることになるのだった。

第六章：青い髪の少女（後書き）

カロネア嬢の登場回……主役を差し置いて、（副題ながら）タイトルロール（？）……を務めるとは、如何なものかと思わなくはないのですが……

あと、もう少し短くまとめる予定だったんですが……少々長めの文章になりました。

それと、聖霊の存在と設定を紹介できました……ようやく、この世界の魔法に関する設定の一端を披露することが叶いました。

これより、ファンタジー的な設定を巧く披露しながら、物語を進められると良いのですが……

第七章：最初の朝礼

さて、ケルティス達が教室に入った頃、神殿の別所において素つ頓狂な声が響き渡る。

「……………わ、私がですか……………？」

驚愕の余り部屋に響いた声を耳にして、そこにいる者達の視線を一斉に集める。

声を上げた彼女は、愕然とした叫びと共に席を立ち、そのまま果然と立ち尽くす。

そんな彼女へ上座に座る老爺が、その白く長い自らの髭を撫でながら声をかけた。

「……………ふむ……………受けてくれんかね？」

あの子の相手をするのに、其方が適任ではないか、と言うのが多くの者の意見じゃ」

「……………それは……………確かに、そうかもしれませんが……………しかし……………」

「無論、不慣れな其方の為にも、協力や補佐を惜しむつもりはないしの……………」

そう言つて、老爺は部屋を見渡す。その視線に応える様に部屋の中の皆は、立ったままの彼女に向けて頷きを返して行く。

その様子を目にして、躊躇いが窺える様子ではあるが、彼女は承

諾の頷きを老爺に返した。

十 * 十

ケルティスは、ニケイラとカロネアへ自分の家族に関して簡単な紹介を述べて行く。

「はあ……ケルティスさんのお母様が、“漆黒の姫將軍”……
しかも、その実家がミレニアン家だったなんて……名門の姫君じゃないですか」

「あれ？……ニケイラさん、貴女のお父さんは緑風騎士団の騎士だ
って言ってますでしたか……？」

同じ盟約軍の騎士になるんだし、知っているんじゃない？」
「いえいえ、私の家 ティティス家って、万年平騎士な下級貴族
の家柄ですから……」

他国の貴族の方々のお話なんかあんまり耳に入ってきませんって
……」

ケルティスの説明に感嘆の溜息を漏らすニケイラと、そんな彼女
にケルティスは些細な疑問を投げかける。そんな二人の会話を眺め
ていたカロネアから声がかかる。

「それにしても、セイシア様のご子息で、レイン隊長の弟君という
ことなら……大分、年の離れたご姉弟きょうだいになるのですね」

「そうですね……ラティル先生と義理の御兄弟ってことになるか
ら……えーっと、20歳位の年の差ってことなのかな……？」

「え……ええ、そうですね……」

カロネアの呟きに応じたニケイラの言葉に、ケルティスはその返事の言葉を濁して呟く。彼は自分の出生や年齢等に関した事柄を話せずにいた。

それは、折角得られた友達に隔意を持たれることを恐れたからかも知れない。

ともあれ、そんな心持ちが彼に無意識に働きかけたのか、心に浮かんだ疑問をカロネアに向けて投げかける。

「そう言えば……如何してカロネアさんは、セイシア……母さんやレイン姉さんのことを知っているんですか？」

その問いかけに、カロネアは目を丸くして瞬いて見せた後、軽く笑って答えを返した。

「それは、私が下町の育ちだからですよ。

レイン隊長は、都市の治安を預かる責任者として、折りを見て下町にも足を運んで下さいますし……セイシア様の武勇伝は、上流の貴族の方々よりも、下町に住む下々の者の方が親しんでいるのではないでしょうか」

そう答える彼女の仕草は、下町育ちにしては優雅な挙措ではないか……と、ケルティスとニケイラは思ったが、深く追求する様なことはしなかった。

ケルティスが、ニケイラとカロネアに自分の家族のことなどを話し始めて暫くした頃、次々と学院生徒が教室に入室し始めていた。やがて、ケルティス達の話が一段落する頃には、教室は数十人の学院生徒が集まり、教室内の席は概ね埋められた状態になっていた。

話に夢中であつたケルティスやニケイラは余り気付いていなかったが、この教室 中等部一年灰組の教室に入室した生徒達は、入つてすぐの所で一応に驚きの表情を浮かべるようになっていた。それは教室の中央辺りの席で、談笑する三人の少年少女の中に“虹色の髪を持つ少年の姿を認め、更に少年の傍らには、この国では珍しい青い髪を持つ飛び切りの美少女の姿も見受けられたからだ。こんな珍しい髪の色を持つ同級生の姿に驚き、そんな同級生とともに学生生活を送ることに好奇心や興味が湧き起こり、そして一部の者達はその同級生達の正体に気付いて更に驚嘆することになるのだった。

* * *

この一年灰組へと配された生徒一同が集まり、程なくした頃合に教室入口の扉が開いた。

「……あ……！」

教室に入つて来た人物の姿を目にして、ケルティスやニケイラ、それに一部の生徒達が驚きの声を短く漏らすことになる。

その人物とは、くすんだ金髪を伸ばした一人の女神官であつた。出席簿らしい帳面を小脇に抱えた彼女の瞳の色は、“虹色”である。この色の瞳を持つ人物は、世界でも二人しかいないとされている。そう……教室に入室して来た人物とは、ラティル・コアトリア、その人だつたのだ。

ケルティスとニケイラは先程まで一緒にいた人物の登場に驚いて

いた。他の生徒達の殆どは、噂を見聞きしても、その顔を知らずにいる。しかし、噂に聞く特徴を目にして彼女と覚った者は、意外な人物の登場に驚きを隠せずにいた。

動揺にざわめく教室内を、敢えて気に留める様子も見せず、ラテイルは教室の前に置かれた教壇の方へと歩を進めた。厳かに悠然とした足取りで教壇に向かうラテイルの姿を目にして、生徒達のざわめきも徐々に静まって行く。

そうして教室内が物静かな雰囲気包まれようとし始めた時……

一段高くなっている教壇に足をかけようとしたラテイルは……

教壇から足を踏み外し……

盛大な音を立てて……

教壇へと……物の見事に倒れ込んだ。

倒れた時に手放してしまった帳簿が……

教壇の上の虚空を舞い……

彼女に遅れて……

一際高い音を立てて……教壇に倒れ落ちる。

* * *

「「「……………」」」

暫しの間、教室内は異様な沈黙に包まれていた。

「……………」プツ……………」

「……………」ククツ……………」

「「……………」フフフツ……………」

「「……………」ハハハツ……………」

しかし次の瞬間、押し殺した笑い声が漏れ始める。

「「「ワハハハ……………」！」」」

「「「アーツハツハツハツ……………」！」」」

そこから笑い声が教室内を伝播して行き、遂には爆笑の渦へと変化して行った。

「……………」

そんな爆笑が響く教室の中で、ラティルは黙然として立ち上がり、転げ落ちた帳簿を拾い上げる。

そして、教壇の中央に置かれた教卓の許に立って、教卓に抱えていた帳簿を置いた。

「……………」コホン……………」

爆笑する生徒達の声に掻き消される程度の音で、ラティルは細や

かな咳払いを行う。

そして、生徒達に向かって声を上げる。

「……皆さん、静かにして下さい」

「ハッハッハッハッ……！」

「ケラケラケラ……！」

「ヒーツ、ヒャッハッハッハッ……！」

しかし、それに生徒達は気付いた様子もなく、爆笑の声を上げ続ける。

「……静かに……皆さん、静かに……」

爆笑する生徒達に向けて、ラティルは懸命に声を張り上げる。

しかし、そんな彼女に構うことなく笑声は途絶える様子は見えない。

そんな教室の様子に、ケルティスは戸惑いの余り、幾度となく周囲に首を巡らす。

ケルティスの様に、爆笑する面々とは異なる面持ちで周囲や教壇を見詰める者達も少しはあるものの、爆笑の中になる教室の雰囲気は埋没していた。

* * *

爆笑の渦がまだ渦巻く教室の中、制止の声を上げ続けていたラティルは、一転して教卓へと視線を落とした。そうして、頭を垂れ

た姿のまま、彼女は長く長い一息を吐く。

しかし、そんな彼女の様子に気付いた者は、この時点ではケルテイスぐらいしかおらず、気付いた彼は、次の瞬間に備えて身構える。彼がその身を硬くして備えた刹那、無表情な顔を上げた彼女の口より、低く重く短い声が教室内に拡がる。

「……………黙れ……………」

「……………」

たった一言、「黙れ」と言った彼女の声で、教室には慄然とした静寂の中に陥っていた。

教室を一瞬睨み付けた彼女の姿に、笑い転げていた生徒達は一転して恐怖に慄きの余り、声を発することを忘れる。

*
十
*

何故、このようなことが起こったのか……それは、彼女が言葉と共に自らの魔力を教室全域に向けて放ったからだ。しかも、ただの魔力を放ったのではない。彼女が放った魔力には、とある感情が込められていたのだ。

その感情の名は、殺意……

殺気を纏った濃密な魔力が教室に満ちることにより、そんな感情と縁のない生徒達は、その圧迫に精神や魂魄が軋み、恐怖と言う感情を絞り出す結果となっていた。

実の所、この強烈な威圧は、お転婆が過ぎるレイアに対して、叱り付ける為に身に付けたと言って過言ではない。

悪戯や悪ふざけが過ぎることに幾ら言葉を連ねて叱っても、一向に悪びれた色も見せない娘に対して、非常手段として半ば本気で殺気を放つと言う方法を彼女は採るようになった。

冒険者としてある程度の功績を記すラティルは、幾つかの修羅場や死線を経験している。そんな彼女が放つ殺気は、相当な凄味がある。

流石に、人間に対して非殺を旨としている彼　もしくは彼女は、本気の殺意や殺気を放っている訳ではないが、レイアのような子供には十二分以上な威力を発揮する。

ちなみに、コアトリア家で殺気の放射この方法が用いられる頻度はそれ程多くはない。

これはレイアの悪戯が少なくなっている……と言う訳ではなく、この方法を使った際、近くにメイ達　コアトリア家侍女の面々がいた場合、高確率で彼女達が機能停止して昏倒するからだ。強い感情が籠る魔力が、魔法機械の誤作動を誘発することが原因らしい。ラティルは、人ならぬ侍女達のことを思って、普段はこの方法を自粛しているのだ。

慄然とした沈黙の中、教壇よりラティルは生徒一人一人を睨み付ける様に首を巡らす。

そして、その背後の虚空では密やかに漂う彼女の守護聖霊　リ
ユッセルの目が、人間の瞳の形状とは異なる物と化していた。

その虹彩は金色に輝き、その瞳孔は紡錘形と言った形状を成している。それは“竜瞳”と称される代物であり、魔力や精霊力を知覚し、制する力を秘めていると伝えられており、本来なら人間が持つことのない瞳とケルティスは聞き及んでいる。

生徒達に見える筈はないものの、彼はラティルの背後で浮かびつ　つ　“竜瞳”で一同を睥睨する。その口元をニヤリと歪めたその表情は、浄き聖霊と言うよりも意地の悪い邪霊の様にも見えた。

ともあれ、沈黙する生徒一同を一頻り見渡した後、ラティルは一旦、軽く頭を垂れる。

そして面を上げた時には、教室に申し掛かっていた殺気は雲散霧消し、朗らかで柔らかな笑みを浮かべたラティルが生徒達の前に立っていた。

その余りの変貌振りに、啞然・呆然する生徒が散見されることも構わず、教壇の彼女は言葉を紡いだ。

「おはようございます、皆さん。私の名前は、ラティル」コアトリ
ア……この学級の担任を務めることになりました。今年一年、よろしく願いますね」

「「「……………」」」

朗らかな笑みと共に紡がれたその言葉と、先程までの異様過ぎる
威圧ギャップの懸隔から、生徒達は一様にその返事の言葉を迷う。

しかし、そんな生徒達の様子を気にすることもなく、ラティルは
言葉を続けた。

「それでは、これから間もなくして入学の式典が始まります。

式典が始まる前に、皆さんは大講堂へと移動して貰うことになり
ますが……」

その前に、幾つかの注意事項をここで述べておきます。初等部か
らの進級した生徒の皆さんは知っているかもしれませんが、確認の
為にも良く聞いておく様に……」

そう言ってから、帳簿を手にしたラティルは式典に関する注意事
項を順に述べて行ったのだった。

式典の注意事項を説明が終った後、教室の一同はラティルの先導
の下、入学の式典に参加する為に大講堂へと向かったのだった。

第七章：最初の朝礼（後書き）

副題の文言を、「本当は怖いラティル先生」……ってのにしても
良さそうな内容に仕上がってしまいました……（ダウシテカウナッ
タ？）

生徒の家族が担任を務めるとか、始業初日になって担任が決まる
とかは、現実世界では避けられる、と思うのですが……

そこは政教一致も問題ない様な異世界の物語と言うことで、ご容
赦願いたい所……

第八章：式典の後で

担任であるラティルの先導で、ケルティス達は回廊を進み、学院の中央部にある大講堂へと足を踏み入れた。

大講堂には、初等部・中等部・高等部の生徒である およそ三千人前後の生徒が集合している。

初等部・中等部・高等部のそれぞれ一年生となった生徒達が、講堂の前方に用意された席へと着いて行き、一方でそれぞれの二年生と三年生は講堂後方の座席に着いて行く。

間もなくして、生徒の一同が席に着き、入学の式典は始まった。

* * *

「新たにこの学舎へ入学した生徒諸君、初等部・中等部より上位の学部へと進学した生徒諸君、入学、そして進学おめでとう。」

そして、各学部にて上の学年へと進級を果たした生徒諸君、進級おめでとう……

これから君達は、セオミギア大神殿学院の学び舎にて様々な知識を身に付けて貰うことになる……」

式典が始まり、今の講壇には学院の長を務める老爺 ギルダーフ学院長による祝辞が述べられている。新入生への祝いの言葉を皮切りに、様々な教訓を含んだ長い講釈が始まる。

最初は緊張もあって、新入生達は肅々とした様子で学院長の講釈

を傾聴していたが、徐々に退屈の虫が頭をもたげ、欠伸や隣同士での雑談をする生徒達が、あちらこちらで散見され始める。

そんな不心得者が半ばを占めぬ内に、学院長の講釈は一段落を向かえる。

「……それでは、儂の話もこれくらいにしておこうかの……
最後に、生徒諸君……改めて、おめでとう。これから始まる学院での学びの日々が実りあるものであらんことを……」

そう言つて、ギルダーフ学院長は一旦、言葉を途切れさせる。そして、生徒達の列の左脇に並べられている教師達の席へと首を巡らす。

「さて、今朝の各学年の組分けを確認し、自身の学級の担任とは顔合わせを済ませていることと思うが、ここで改めて講師の方々を紹介することとしよう。

まずは………」

そうして学院長たるギルダーフ翁は、講師を務める学院の神官達を、次々と紹介して行った。

そうして、式典は滞りなく進み、全体で1刻^{2時間}ばかりの時間を経て、式典は終了して散会となった。

散会する際に、生徒達は各々の教室へと一旦戻ることと言い渡された為、生徒達は三々五々と言った様子で教室へ続く回廊を歩き去って行く。

* * *

教室へと戻ったケルティス達は、程なくしてやって来た担任ラティルの指示の下で各々が席に着いた。生徒一同が席に着いたことを確認したラティルは、小さな頷きを見せた後に生徒達へと声をかけた。

「はい、皆さん。式典の参加、ご苦労様でした。

皆さんはこれから、この学び舎で、この教室を中心に講義や授業を受けて貰います。

さて、皆さんの中には初等部からこの学び舎で勉学に励んでいた方々もいる様ですが、中等部での授業の形式は初等部とは少々異なります」

そう言った後、彼女は講義についての説明を続ける。

「初等部では、学級それぞれの担任を務める講師の方が、全ての科目の授業を行っていましたが……

中等部以降では、各科目に応じて、各々の担当を務める講師の方々が、それぞれ講義や授業を行う形になります。」

そう言うと、手元に残った生徒に配った紙片の一つを掲げて、説明の言葉を続ける。

「今、皆さんに配った紙片には、中等部一年となった貴方達が受けることの出来る科目の一覧が記載されています。

ご覧の通り、その科目の数も初等部よりも増えています。の中には、生徒全員が受講する必須科目もありますが、幾つかの講義は選択科目となっています。そんな選択科目に関しては、自分が興味のある講義や授業を選んで受けるようにして下さい。

明日から一巡りの間は、選択科目の講義を選ぶ猶予期間となっています。この間に、よく考えて自分が受ける講義を選んで下さい」

穏やかに笑みを浮かべた面持ちで、ラティルは講義についての説明を切り上げる。

そして、明日より始まる学院学舎での生活に関する注意事項などを述べて行く。

* * *

やがて、一通りの説明を終えたラティルは、今日の課業の終了を告げ、教室より退室した。

ラティルの姿が扉より消えると、生徒達の間には漂った微妙な緊張感が緩む。そんな緩んだ空気の中で、生徒達は各々が帰宅の為の支度を行い始める。

そんな賑やかな雰囲気の中で、ケルティスは机に置いた幾つかの帳面を右手で手早く集めて席を立とうと顔を上げる。

そんな彼の目に、教室へと入って来た一人の男子の姿が目に入った。その人物は制服を身にまとっており、この学舎の生徒と思われる。しかし、ケルティスには見覚えのない人物である。

誰だろうか、と首を傾げるケルティスであったが、当の人物は見る間に彼の方へと近付いて来た。そして、ケルティスの前で仁王立ちとなったその人物は、尊大な態度と口調で言い放った。

「貴様が、今年入学したと言うコアトリア家の者か？」

「……………は、はい……………そうですね……………」

いきなり尊大に言い放たれた問いかけを耳にして、戸惑いに目を数度瞬かせた後、ケルティスは気圧された様子ながら答えを返した。そんな返答の様子に、問いかけた人物は鼻を鳴らして言葉を続けた。

「フン……………どんな奴かと見に来たが、大したことのない奴だな……………」

「……………な……………！」

何ですって！ 失礼じゃないですか！」

紡がれた無遠慮な言葉に、隣の席に着いていたニケイラが立ち上がって叫ぶ。だが、そんな彼女に、彼は胡乱な視線を返す。

「ん？……………なんだ、無礼な女だな……………誰だ、貴様は？」

「無礼ですって……………私の名前は、ニケイラ」ティティスです。無礼と言うなら、名乗りもせずにそんな言い方……………貴方こそよっぽど無礼です！ 何様だと言うんですか！」

怒りに口調が些か荒くなったニケイラの様子に、一瞬怪訝な面持ちを見せる。

「……………ティティス？……………聞いたことのない家名だな……………」

ん？……………俺の名か？……………俺の名は、キエガフ伯爵ディケンタル家の嫡男 デュナンだ！ 分かったら、口出しをするな」

「……………っ！」

尊大な態度を改めることなく、見下すように言い立てる彼 デュナンの言葉に、ニケイラは激昂しようと息を呑んだ。だが、そん

な彼女の肩を誰かが掴んだ。

「……………カロネアさん……………」

振り向いた彼女の目には、ゆっくりと頭を横に振るカロネアの姿があつた。カロネアの様子に毒気を抜かれてか、ニケイラは開こうとしていた口を閉ざす。

幾分か冷静さを取り戻したニケイラは、ディケンタル家と言う単語の意味を思い出していた。その名　家名は、セオミギア王国にて有数の名立たる家柄として知られるものの一つである。

*
十　*

第三紀初頭に建国されたセオミギア王国において、貴族の家門に名を連ねる家々は、周辺諸国のそれに比べて長い歴史を誇る家柄であるものが殆どである。

そんな家々の中にあつて、王国建国以前　古代紀より連綿と続き、セオミギア王国建国にも大なり小なり関わりを持ち、貴族として家格や権勢を保持している家となれば数は限られる。

このような長い歴史を持つ名家は、大陸西方域の諸王国の中でもよく知られている。“漆黒の姫將軍”　セイシア・コアトリアの実家であるミレニアン家もその一つであり、子の少年が示して見せたディケンタル家もまたその一つであつた。

そんな彼の出自に気圧された訳ではないが、肩を叩いたカロネアに場を譲るように半歩下がる。そんなニケイラと入れ替わる様にして、カロネアが言葉を紡ぐ。

「……デユナン様、でしたか……名門ディケンタル家のご子息のことですが、それにしても物言いに些か品がない様にお見受けしますが……？」

ニケイラに割って入る形で呟かれたカロネアの言葉に、デユナンは眉を顰めて声の主である青い髪の少女を睥睨する。その姿を暫し眺めた後、彼は嘲る様に口元を歪ませる。

「……フン……その肌の色、生粋のユロシア人ではないな……オセ系か……？」

そんな下衆の輩が、この名門出のこの俺に生意気な口を利くのか？」

「確かに、私は生粋のユロシア人ではなく、都市南西……下町の出身ではありません。ですが、私の出自と、貴方の品性の有無は関係がないのでは……？」

傲然とした態度で侮蔑の言葉を投げかけたデユナンに対し、カロネアはそれを軽く受け流すように言葉を返す。その様に、顔を紅潮させ、激昂に怒声を上げる。

「……下賤な身の癖に、口答えするな！」

コアトリア家の後楯にミレニアン家が付いていると知って強気に出ているのだろうが、我がディケンタル家の権勢ちからをもってすれば……

……」

「……ユロシア人至上主義白貴主義に……自国優越主義……それと、傲然に過ぎる態度
……まさに、“ユロシアらしい”態度だな……」

激昂する少年　デュナンへ予期せぬ方角より声が投げかけられる。そこに含まれていた揶揄の響きに、デュナンは紅潮した顔を声がした方へと巡らせる。

*
†
*

“ユロシアらしい”……それは、この場合において贅辞であろう筈はない。

“ユロシア”と言う単語は、北方大陸を指す場合もあり、大陸西方域を指す場合もあり、大陸西方域を流れる大河を指す場合もある。しかし、その中でも大陸西方域より生じ、北方大陸を制覇し、世界四大大陸中三つをその版図に加えた古代帝国の名として広く知られる。

上記の“ユロシア”とは、特に古代帝国のそれを指すものである。魔法にのみ価値を置き、魔法を使えぬ異民族を虐げて、奴隷の如き圧政によって世界を席捲した大帝帝国　“ユロシア魔導帝国”……その名は、ユロシア地域以外の世界各地で「邪悪な国家」の代名詞として、しばしば名の挙がるものである。

とは言え、古代帝国が滅びて既に千年近い年月を経ている現在、
ユロシア地域以外の者が想起する“邪悪な帝国ユロシアらしい”気質を持つユ
ロシア人など殆どいないと言えることであろう。

*
+
*

振り向いた彼が見付けたのは、眼鏡をかけた痩身の少年の姿だっ
た。

「貴様は、誰だ！」

「名家であることを鼻にかける以外に、することがない様な人間と
話すつもりはない」

「貴様……それ以上の愚弄は許さんぞ！」

嘲弄の色が漂う少年の言葉に、デュナンはその顔を更に紅潮させ
る。

しかし、そんな彼の様子に、些かも表情を変えた様子も窺わせず、
眼鏡の少年は言葉を返した。

「愚弄と言うなら……貴公が、そのコアトリア家の子息に対して
行ったそれを愚弄と言わぬのか……？」

「……ぬぬぬ……」

涼しい顔で言い返された言葉に齒軋りするデュナンの様子を気に
することもなく、眼鏡の少年は席を立って教室から出て行った。

後を追おうと数歩駆け出して、本来の目的を思い出したのか振り

向いたデュナンは、ケルティスに怒気を纏ったまま詰め寄る。

「貴様等……何処の馬の骨とも知れん輩の癖に、俺を馬鹿にしおつて！」

怒鳴るデュナンに対して、暫し口を閉ざしていた少女　ニケイ
ラより声上がる。

「何で、そこでケルティス君に詰め寄るんですか！　それって、八つ当たりもいいところじゃないですか！」

その声に、彼は少女を睨み付けて、怒声を吐く。

「煩い……！」

そして、怒鳴るだけ怒鳴って、ある意味で落ち着きを取り戻せたのか、彼　デュナンは改めてケルティスの方へ向き直りながら侮蔑や嘲弄と言った感情を含ませた言葉を紡ぎ出す。

「だいたい、こいつの家　コアトリア家と言うのはミレニアン家の後楯があるのを良いことに、好き勝手に振舞っている輩ではないか！」

それに、俺は知っているぞ……コアトリア家に、今年中等部入学する様な年頃の子弟はいなかった筈だ。どうせ、魔法使いとして知られるティラス猊下が手遊びにでも作った人造生命体の類なのではないか……？」

デュナンの言葉に、真っ先にケルティスが反応する。

「僕は、ホームクルス人造生命体などではありません！」

「……！……！」

先程まで気弱な反応しか見せなかった少年　ケルティスが、声を荒げて反論する様子に、少年の脇にいた二人の少女だけでなく、教室で彼らの遣り取りを聞くとはなしに聞いていた者達も、驚きからその視線を少年に集中させる。

予想外の反応に、教室の中は一瞬の沈黙で満たされた。

* * *

だが、その沈黙から逸早く立ち直ったのは、デュナンであった。彼は意地の悪い笑みを浮かべて、ケルティスに向けて言葉を紡ぐ。

「……フツ……そこまで、声を荒げるとは、やはり疚しいことを………」

しかし、その言葉は紡ぎ終える前に、背後より肩を掴んだ腕の持ち主によって遮られた。

「……おい……それ以上、馬鹿な話を喋ってんじゃねえ………」

デュナンの背後に立つ人影の姿を目にしたケルティスは、その見た人影の名を呟く。

「……レイア……さん……それに、フォルン……さん………」

デュナンの背後に立っていた者……それは、憤りの余りに目の据わったレイアと、彼女の背後で冷やかな視線をデュナンに向けるフォルンの姿であった。

第八章：式典の後で（後書き）

新キャラ登場回……尊大かつ偏見持ちなデュナン君の登場となります。

もう一人のことは後々の回にて紹介できるでしょうから、少々お待ち下さい。

ご意見・ご感想が戴けると幸いです。

第九章：“虹色”の化物

憤りの余り目の据わったレイアに睨付けられ、デュナンの舌はその役目を忘れたかの如く硬まった。

舌は強張り、瞬きも忘れた彼の姿に構うことなく、憤りの炎を瞳に宿したレイアはデュナンに詰め寄る。

「……さつきから聞いてたら、好き勝手言いやがって……………」

射殺さんばかりの鋭い視線で身体を硬直させたデュナンの胸倉を掴み、レイアは怒気を緩めることなく、更に眼光鋭く睨み付ける。

そうして、否応なく視線を合わせられたデュナンの視界の中で、眼前のレイアの姿が一瞬霞に包まれたかの様に揺らぐ。

次の瞬間、彼の前に立ち、その胸倉を掴む者は、驚くべき姿へと変容していた。

そこに立っているのは、背格好や面立ちからレイア「コアトリア本人に間違いない。だが、その髪の色は“虹色”のそれから白金色へと色合いが変わり、瞳の色もまた同様に“虹色”から銀色へと変じている。

しかし、そんな髪や瞳の色の变化など、変容の全体からみれば些細なことではなかった。

銀色に変じた虹彩に穿たれた瞳孔は、人の持つ円い形状のものでなく、紡錘形の竜の如きと形容される形状に変じている。

更に、側頭からは短いながらも一对の角が生え、制服の裾よりしなやかに揺れる蛇や蜥蜴のそれに似た尻尾が覗いている。

そして、彼女の頬から首筋、或いは手の甲から腕にかけて、それに裾より覗く尻尾や脛等は“虹色”に輝く鱗に覆われている。

他にも、口元から覗く歯や指先の爪が鋭い物へと変じていることに、少数のものは気付いていた。

人間としての容貌や体躯を持ちつつも、異形の特徴を併せ持つその姿は、半竜人と称される種族のそれである。

*
†
*

半竜人とは、竜族より派生したと伝わる人型の亜竜族である“竜人族”と“人間”の混血児を指す。

この世界に住む人族と竜族は容姿の隔たりがあるわりに生物としては比較的近縁であると言われており、両者の混血児が誕生する例は神代から現代にかけて幾つか散見される。

しかし、歴史的に両者の間には消極的ながら根深い対立関係が横たわっており、両者の間で子を儲ける間柄となれる例は稀有と言える、

ともあれ、そんな両者の間に生まれた“半竜人”は、人間の持つ比較的高い知性と、竜人族の持つ膂力や魔力の高さを併せ持つ存在である。

ただ、竜族や亜竜族と言った“竜王の眷族”とされる諸種族は、多くの人間にとって恐怖の対象であり、彼等の血を引く“半竜人”も恐れ忌まれる傾向にある。

“竜の如き”瞳で再度睨み付けられ、デュナンの目元には涙が浮かぶ。その瞳は、人間の本能より恐怖を湧き上がらせる何かを秘めていた。

恐怖に身が竦んでいることが窺えるデュナンであったが、そんな彼へと救いの手を差し伸べる者はいなかった。それは先程までの彼が見せた言動から同情を抱く気が失せたと言うこともあるが、一方でレイアに関する様々な噂を耳にしている生徒達が存外多かったことも影響しているだろう。

虹鱗で身を包んだ異形の姿に変わって、祖父より伝授された竜族独自の体術 “竜闘術” を用いて、下町の破落戸達コロツキと時に大立ち回りを演じる彼女のことは、“虹の身”の異名とともに一部の人々大神殿学院の神官や生徒及び、都市南西の繁華街の住人などの間で幾分か知られるものとなっている。

大の大人を簡単に倒してしまえる力量を秘めた彼女を前にして、それを制止するための言動を起こそうと言う度胸の持ち主は、周囲でなりゆきを見守る生徒達の中には見付からなかった。

異形の瞳に睨付けられ、まさに蛇に睨まれた蛙と言った状態で恐怖に凍り付いていたデュナンは、漸く硬直が解けた口から擦れた声を漏らした。

「……………この……………化け、物……………」

「……何だと！……てめえ、言わせて置けば………！」

怯える少年の言葉に、レイアは激昂して歯を剥き出す。曝された鋭い牙を目にして、デュナンは喰い殺される自分を想起して、声なき悲鳴を上げ、目を瞑って顔を背ける。

しかし、何らかの痛みが与えられると怯えるデュナンの身体には、何の身体的痛みも与えられることはなかった。恐る恐る目を開いた彼の瞳は、振りかぶるレイアの腕を押さえる別の人間の手が映った。

「……………姉さん、それぐらいで止めときなよ……………」

小さな溜息とともに吐かれた声の主は、彼女の背後に控えていた彼女の弟　フォルンだった。

「止めるな、フォルン！」

「……………殴りたい気持ちは分からなくはないけど……………」

「ここで手を出したら、誤魔化しようがないから……………」

「……………ッ……………！」

フォルンの言葉に、レイアは舌を打って振り上げた腕の力を抜く。腕の力が抜けたことを感じたフォルンは掴んでいた手を放す。

そして、姉の肩を叩いて脇に退かせて、一歩踏み出してデュナンの前に立った。

「僕はフォルンⅡコアトリア、そこにいるケルティスⅡコアトリアの縁者なのだけれど……………」

君の名前は、デュナンⅡディケンタルと言っていたね？　ディケ

ンタル家　　キエガフ伯爵家のご嫡男だそうですね？」

先程の姉レイアが見せた憤激した様子に反して、弟のフォルンは慇懃な姿勢と穏やかな物言いで声をかけた。

「初等部では見かけた様子はないけれど、他の学塾からの新規入学組ですか？」

「それが何だと言っんだ！」

「……特に意味はありません。ただ、一つ質問をさせて貰います。貴方は、この国の主権者が何方かご承知ですか？」

学院初等部と同等の学塾で学ばれたのならご存知でしょうが……」

「……………な、何…………？」

穏やかな口調と慇懃な態度を崩すことなく投げかけられた問いかけに、デユナンは一瞬口籠もる。一時、視線を彷徨わせた彼は、次の瞬間には答えを返した。

「それは………… 国王陛下に決まって…………」

「…………違います。よく考えて下さい」

しかし、デユナンが答えを言い終える前に、フォルンの言葉がその声を遮る。不意に遮られたことに、不愉快な面持ちを見せつつもデユナンは再度一考する。

そして、再び応えの言葉を紡ぎ直す。その口調は何処となく苦々しさの含まれたものに聞こえた。

「……………大神殿……………か……………？」

「ええ、そうです。此处　セオミギア王国は、セオミギア大神殿を本拠とするセオミギア教会が主権を有する国家と言うことになっています。

セオミギア王家は、セオミギア教会　その長であるセオミギア大神殿法院長が統治を委任されているに過ぎません。少なくとも形式上は、そうなっています。

そして、セオミギア王国の貴族は国王陛下によって叙爵されます……ですが、これも大神殿の各院長の了承の許で行われることになっています。」

それだけ言うと、フォルンは一旦言葉を途切れさせる。一拍の間を置いた後、フォルンは再び口を開いた。

「王国より領地を拝領した上級貴族の嫡子が、大神殿院長を務める高位司祭の縁者を、謂われもない誹謗中傷で、貶めると言う行為がこの国において、どう言う意味を孕んでいるか、ご理解頂けますか……………」

咬んで含める様に、数語ずつを区切って語られる言葉の内容に、デュナンの顔色は徐々に色を失って行く。そんな彼に向けて、フォルンは自らの碧の瞳で鋭く睨み付ける。

その様は、教室に残っていた一年灰組の生徒達には、朝礼の際の恐怖の再来にも感じられた。

* * *

そんな碧の鋭い視線と、虹鱗の者の威圧を前にして、デュナンは先程までの威勢を霧消して行く。

「……ッ……きよ、今日はこの程度にしてやる……いずれ、吠面をかかせてやるからな……！」

最後の矜持で、何とかそれだけを口にすると、彼は踵を返して足早に教室から出て行った。

そんな彼と入れ違いに、ラティルが教室に顔を出す。

教室の中に漂う微妙な空気を察して、微かに眉を顰めたのも僅かな間だけで、ケルティス達の許へと歩いて来る。

その途中で、何か囁く様に唇を動かし、片手で簡便な印を結ぶ。しかし、そんな素振りも精々数歩ばかり進む間に済ませて、穏やかな表情でケルティス達の前に立つ。

やって来たラティルは、先程までの騒動で身を強張らせているニケイラの方へと視線を向けて、微笑みとともに言葉をかけた。

「ニケイラさん」

「……は……はい……」

「貴女……昨日、この都市に来たと言っていた様だけど……生徒寮で寄宿する予定なんですよね」

「……は、はい……そうです。頼る親戚もいないので、寮に入れる様に手配して貰っていて……」

「そう……それじゃあ、入寮の手続きは済んでいる？」

実は、入寮の手続きが終っていない生徒がいるらしいと小耳に挟んだから、もしかして貴女のことなんじゃないかと思って来てみたのだけれど……」

ラティルの告げた言葉に、ニケイラは「あつ」と小さく呟きを漏らした後、言葉を返す。

「……多分、それ私のことです。予定より遅く到着したので、入学式の当日に入寮の手続きをさせて貰うつもりでいたんでした……」

今思い出したと言った様子の言葉を漏らした。そんな彼女の返事を耳にして、軽く頷いたラティルは、言葉を続ける。

「……やっぱり……それなら、私が入寮の手続きをする受付を案内しましょうか？」

「え、良いんですか？……是非、お願いします！」

ラティルの声に、喜色も露わに承諾の返事をした。

「それは良かった……と、その前に……」

そんな少女の様子に微笑んで見せた後、視線に冷たいものを纏わせて首を巡らす。

「……レイア、『視て』いましたよ……そんな姿で、下級生を虐めているんじゃないません」

「いや、母様……あれは、あいつの方がケルティスを……」

冷たく見据える母の姿に、思わず抗弁の言葉を漏らそうと、レイアは口を開く。しかし、それを制するようにラティルから言葉が紡がれる。

ラティルのその言葉から、彼女が先程の仕草が聖霊魔法の『過去視』を用いたのだと、ケルティス達は察する。

「『視て』いたと言っているでしょう。」

事情は分かります。でも、あれはやりすぎだと言っているんです。半竜人の身で、人を殴ればただではすまない可能性があるのは貴女も承知していることでしょう！」

「……………それは……………」

母の言葉にレイアは、言葉を途切れさせる。次いで、ラティルは視線をずらす。

「それに、フォルン……………」

「……………え？……………僕も……………？」

父より不意に投げかけられた言葉に、フォルンはキョトンと目を丸くする。姉と違い、普段からラティルに叱られることが殆どないだけに、間拔けな顔で父である彼女を見詰める。そんな少年に向けて、父たる女性は叱責の言葉を紡ぐ。

「……………レイアが手を出すのを止めたのは良いとして……………何故、あそこまであの子を脅しつける必要があった……………？」

あの様な言い方は、親の地位の威を借りる彼と同じ……………いえ、それよりも、性質が悪い。神殿の威を借りた物言いなんて、おいそれとするものではありません！」

「……………でも……………それは……………」

「……………あんな物言いが続けたら、相手の敵意を徒らに掻き立てるだけでしょう。」

ディケンタル家は有力な名家の一つには違いありません。あれでは、ミレニアン家のジュリアン閣下やオルトヴィン卿にまで迷惑がかかるかもしれないでしょう」

「……………それは……………はい……………すみません……………」

「…………………………ごめんなさい……………」

言葉を畳み掛けられたフォルンは、ラティルに向けて頭を下げる。頭を下げる弟の姿を目にして、レイアも本来の姿に戻った上で頭を下げる。

そんな二人の子供達を見詰めて、ラティルは口調を穏やかなものへと変えて言葉を紡ぐ。

「よろしい……さっきも言った様に、私はこれからニケイラさんの案内をするから、貴方達は先に帰っておきなさい。」

二人に告げた後、ラティルはケルティスの方へと向き直る。

「そう言えば、今日はケルティス君の訓練の日になっていませんでしたか？」

「ええ、入学の式典が終った後に、薬院へ来るようにと言われていきます」

「そう……ケルティス君は一人でセスタスさんの所に行けますか？」

「え？……大丈夫です。何度も薬院のセスタスさんの所へは通っていますし……」

ラティルからの問いかけに、ケルティスは答えを返す。その姿に頷いたラティルは、改めてニケイラの方へ振り向く。

「それでは、入寮の手続きをする場所へと案内しましょうか。それと、カロネアさん……良ければ、一緒に来てくれると嬉しいのだけど、良いですか？」

「……はい……」

「……え？……構いませんか……？」

声をかけられた二人の少女は、その言葉の意味を掴みきれぬ様子ながら承諾の言葉を返した。

「それは良かった。それでは、行きましょうか」

二人の返事に微笑を返したラティルは、その身を翻して教室から出るべく歩を進めた。

第十章：回廊の密談？

ラティルに促され、ニケイラとカロネアの二人の少女は教室を出た。

教室を出た少女達に向けて、ラティルは軽く振り向いて声をかける。

「……神殿にある寮に関する諸事は、学院ではなくて、雑務院が担当しているんです。ですから、ニケイラさんには雑務院にある受付まで案内しますね。少し遠いですが、付いて来て下さい。

それと……そちらへ案内する間、貴女とカロネアさんに、少しばかりお話を聞いて貰いたいんです。」

「……あ、はい……」

「……承知しました」

穏やかな中に少し沈んだ調子の言葉に、二人は承諾の言葉を返した後で黙々として、彼女の後を追って歩を進んで行く。

* * *

そうして少女達を先導するラティルは、学院の廊下を幾つか曲がり、人通りの少ない細い廊下を進んで行く。教室を出た際の一言の後、黙然としてラティルは人気のない廊下を進む。

そんな彼女の様子に、怪訝な顔を浮かべつつも、二人は彼女の後を追って細い廊下を歩み続ける。

やがて、人気のない道を幾許か進んだ所で、ようやくラティルは口を開いた。

「……………二人とも……………先程はありがとう……………」

「……………え……………?」

「……………二人とも、ケルティスを庇ってくれていたでしょう?」

「それは……………別に……………」

「私達は、当然のことはしただけですから……………」

ラティルの言葉に、少し戸惑い気味ではあるものの少女達は言葉を返す。少女達の答えを聞き、彼女達へと微かに振り返ったラティルは言葉を続けた。

「……………それでも、ありがとうと言わせて下さい。

それと、レイアが驚かせてしまった様で、ごめんなさいね……………」

「……………えっと、それは……………」

「……………私は噂で多少は存じておりましたので……………」

ラティルが続けた言葉に、言葉を濁したニケイラに対して、カロネアは落ち着いた様子で言葉を返した。

「……………確かに、驚きましたが……………噂では恐ろしい姿と聞いておりましたが……………実際に見れば噂程には恐ろしげなものではなく……………むしろ、お美しい姿に思えました……………」

「わ、私も……………吃驚しましたけど……………綺麗だと思いました……………!」

カロネアの言葉に続いて、少し慌てた調子でニケイラも言葉を返した。

「……そう……そう言ってくれて……ありがとう……」

少女達の言葉に、ラティルは少女達に優しい笑みを見せて言葉を紡ぐ。そして再び、前の方を向いて廊下を進み始める。

再び幾許か廊下を進んだ頃、今度はニケイラが口を開いた。

「……あの……ラティル先生……？」

「どうしたの……？」

教え子の問いかけに、ラティルは歩調を緩めて背後の少女へと、再度軽く振り返る。

「あの……レイアさんの、あの姿って、何なんですか……？」

躊躇いがちな様子で呟いた問いかけに、ラティルは答えを返した。

「ああ……あの子の半竜人の姿……？ あれは、あの子の“異相体”の一つですよ」

「「……“異相体”……？」」

少女達にとって聞き覚えのない単語に、二人は首を傾げて鸚鵡返しに単語を呟いた。

「ティアス書院長が編み出した編纂魔法の一つで創造されたもう一つの身体のことです。」

この私の 女性としての身体も、書院長に施術して得た“異相体”です」

「……そう、なのですか……」

ラティルの説明に二人は短く驚きの声を漏らす。漏れる様に出た眩きを聞いた後、再び言葉を続けた。

「ただ……あの子の“異相体”は、生まれつき持っていたものですけどね……」

「……生まれつき……?」

「……あの……それは、どう言う……?」

何処か眩く様に告げられた内容を聞いて、少女達は首を傾げる。

「言った通りの意味ですよ。書院長も私も『異相体創造』の施術を行った訳でもないのに、赤ん坊の頃から、ことあるごとに幾つもの“異相体”の姿に変わって、私達も驚かされました。」

どうやら、私があの子を身籠っていた頃に、そうと知らずに頻繁に男女それぞれの姿を入れ替わる生活を送っていた影響らしいのですけれどね……」

眩く様に語られたラティルの説明は、最後の方には幾許かの自嘲の色を帯びている様に窺えた。

そこまで喋った後で、ラティルは暫し口を閉ざす。そして、幾許

かの内心の葛藤を巡らせた後に、少女達に向けて声をかける。

「……先程、キエガフ伯爵の子息……デユナン君、でしたか……彼が口にしたことは、ある程度は正しいんです……」

「……え……？」

不意に聞かされた内容に、驚きの呟きが漏れる。しかし、少女達の呟きに反応することなく彼女の言葉は続く。

「あの子　ケルティス君は、普通の人とは異なる方法で誕生した人間です。

デユナン君の言った様に、ケルティス君は中等部に入学できる程の年齢ではありません……いえ、むしろ年齢の面から言えば、初等部に入学することすら難しいでしょう」

「……とても、そうは見えませんでしたか……？」

カロネアが思わず漏らした問いかけに、ニケイラも無言ながら幾度も同意の頷きをしてみせる。そんな二人に答える様に言葉を繋げる。

「それこそ、ケルティス君が特殊な出生をしているが故ですよ……」

ですけれど……ケルティス君は、ホムンクルス人造生命体の様な、世界の摂理

に組み込まれていない不自然な手段で生み出された存在ではありません。そのことは、神殿の法院・魔法院・薬院……それに施政院と言った諸院も、自然の摂理に即して誕生した存在であることを認めています。そのことは間違いありません……

とは言え、ティアス書院長を始め、私達コアトリア家の者達は尋常ではない特殊な生まれや背景を持つ者ばかりです。その所為で、

書院長は少し寂しい思いをしていたと聞いています。

出来れば、ケルティス君の良き友達になって欲しい……」

ラティルが口にした願いを遮る様に、二人の少女の声が発せられる。

「勿論です！……ケルティス君と私は友達です！」

「ええ……ケルティス君やティアス猊下には及びませんが、私も少々人と違う身の上です。人とは違う身の上だからと、ケルティス君を避けるつもりはありません」

ニケイラとカロネアの言葉を聞いて、思わずラティルの瞳が感激に思わず潤むのを感じたのだった。

* * *

潤んだ瞳にそつと手を翳して、再び廊下を進み始めた。ラティルに「あ！」と言う小さな呟きが聞こえる。そして、彼女に向けて少し躊躇いがちな問いかけがなされた。

「……あの、ラティル先生……」

「……？……どうしました、ニケイラさん？」

「……あの……“オセ系”ってどう言う意味なんですか……？」

怖ず怖ずと言った風情で問いかけるニケイラの様子に少しばかり首を傾げたラティルだったが、『過去視』で見ていた情景を思い出

して一応の納得を得る。

「そう言えば、ニケイラさんはランギアの出身だから縁がなかったのかも知れませんか……」

“オセ系”と言うのは、“オセミギア系ユロシア人”と言う意味ですよ」

「……え……？」

その言葉に、ニケイラは困惑に首を傾げた。オセミギアとは、大陸西方域（ユロシア地域）の南岸域に存在する王国であり、セオミギア王国やランギア王国等と同様にユロシア人によって構成される国家の一つの筈だから……

困惑する少女に向けて、ラティルは説明の為の言葉を紡ぐ。

「オセミギア王国は、海洋国家……外海に乗り出し、他大陸との貿易等を生業とする船乗りが多く住む国です。そして同様に、外海に乗り出す海洋国家として、南方大陸にはフェルン王国があります。その影響で、両国の人々は色々な交流があるそうです。その為、南方大陸の民族　リヴィア人との混血者が、彼の国には多く住んでいます。」

そうした人々を指して、“オセミギア系ユロシア人”　略して“オセ系”と言うんですよ」

「……そうだったんですか……」

ラティルの説明を聞いたニケイラは、感心から言葉を漏らす。そんな少女に向けて、ついでとばかりに、ラティルは言葉を付け足した。

「……ちなみに、私の父は、今話した“オセミギア系ユロシア人”なんです。この国の中では色の黒い部類だから、すぐに分かるんですけど……」

そう言う意味では、私も広義には“オセ系”と言うことになりませんね。外見的には、普通のユロシア人と余り変わりありませんが……」

そう言うて少し悪戯っぽい笑みを後ろの少女に向けた。そして彼女は、その笑みを浮かべたままで、二人の内の一人　この話題が持ち上がったから黙っていたカロネアの方に言葉を投げる。

「……カロネアさんは……どちらかと言えば、“オセ系”と呼ばれる人種とは少し違うでしょう？」

「……そうですね。先生の説明に沿うなら、私は“オセ系”と呼ばれる人種とは異なります。ですが、その意味を広く採れば、“オセ系”の範疇に入ると思います」

「え？……ええっ？……それって、どう言うこと……？」

ラティルから向けられた笑みに、ある意味良く似る嫣然とした笑みを返してカロネアは答える。そんな二人の掛け合いに付いて行けないニケイラは首を傾げた。

「フフフツ……それは、いずれカロネアさん本人から聞いてみれば良いでしょう。」

さあ、目的地が見えて来ましたよ」

そう言うラティルの前方に、目的地たる雑務院の一室……学生寮

に関する諸手続きの受付場所が見受けられた。

第十章：回廊の密談？（後書き）

活動報告でも触れましたが、今回は主人公不在で物語が進行しました。

次回は、同時間軸の主人公の話となります。

ご意見・ご感想が頂けると幸いです。

第十一章：薬院の検査と……（前書き）

今回、若干の医学的な記述が存在しますが、あくまでフィクションのもので、実在のそれと若干の（ある程度の）差異があることをご了承ください。

第十一章：薬院の検査と……

さて、雑務院への道すがら、ラティル達が様々な会話を交していた頃……ケルティスは一人で学院の回廊を通つて、大神殿薬院へと向かつていた。

目指す先は、この薬院の客分薬師の一人が使っている診療室である。そこは様々な事情から、彼は誕生より定期的に訪れていた場所でもある。

通い慣れた回廊を渡り、目的の診療室の前に立った時、その部屋の扉はその内より不意に開かれた。部屋より顔を出したのは、診療簿を脇に抱えた一人の女神官であつた。

「……あら、ケルティス君……？」

「……！……フローリア様、こんにちは……」

「こちらこそ、こんにちは……今日は経過観察の日でしたね」

不意の対面で互いに驚き表情を浮かべたものの、二人はすぐさま気を取り直して挨拶を交す。そして、女神官　フローリアはその身を翻して室内へと声をかけた。

「セスタス様、ケルティス君が訪れました」

「ああ、分かつた……入つて貰え……」

室内より聞き慣れた人物の声が彼の耳に届いた。その声に、フローリアからの言葉を待つことなく、診療室へと歩を進めた。

「……失礼します」

一礼とともに診療室へと足を踏み入れた彼は、そこで待っていた部屋の主に出迎えられることとなった。

彼と相対する部屋の主とは、とある亜人種の男性であった。

その身体は瘦躯で、その手には薄手で皮手袋を填めている。その皮手袋の中は鳥の脚に似た全体を鱗に覆われた細く鋭い指を持つ腕が隠されていることを知っている。そして、その顔立ちは、鋭い印象を与える細面であり、肩口へ届く程度に伸ばされた髪は灰色をしており、その髪から覗く耳は鳥の翼に似た形状をしている。鳥の翼の如き耳を持ち、鳥の脚に似た鱗に覆われた四肢を有するこの瘦身の亜人を、トート族と呼ばれている。“虹翼の聖蛇”エルコアトルの眷族にして、高度な医術を会得していることで知られる種族である。

彼が対面しているこのトート族の男の名は、セスタス……彼の父、ティアスの幼馴染と呼べる人物にして、かつての冒険者仲間であり、現在は大神殿薬院でも一目置かれる薬師として在籍している。

もう一つ付け加えるならば、コアトリア家の面々の主治医を自任している人物でもある。

セスタスは入室して来たケルティスに、自らが座る椅子の向かいに置かれた椅子へと座るように促す。その指示に従って、ケルティスは勧められた椅子に座る。

「アリッサ、いつもの検査器具と治療具の用意をしてくれ」
「はい、わかりました」

その、間に、セスタスは傍らに控えていた助手の女性へと指示を出す。その指示に元気の良い返事を行って女性は診療室の隅に片付けられていた幾つかの器具を彼等の方へと持って来る。

助手の女性 アリッサによって様々な器具が一揃い用意された所で、ケルティスの検査が始まった。

* * *

ケルティスの検査は、身長・体重の測定から始まり、脈拍をとり、聴診器で内臓の状態を聞き取る。更に、顔色や肌の状態を観察し、幾つかの体調に関する問診を行う……等と言った具合に進んで行く。

これらの検査は、彼の特殊な出自に関係している。

ケルティスは、一般的な受胎から出産と言う過程を経ずして誕生している。そんな彼が、一般的な人々と差異がどの程度のものかを確認しておくことは、彼へ医術を施す上で考慮すべき要素と言える。

だが、それ以上に……彼と一般人との差異を確認することは、学術的にも、宗教的にも、重要な情報とされている所があった。

その為、彼の主治医と言う立場でもあるセスタスが定期的な身体検査を行うことになっていたのだ。

そして、規定されている各種の検査が終了した後で、今度は別の検査が始まった。

それは左腕の状態を確認する検査である。その検査とは……

「……此処は如何だ……？」

「……え……えっと……一本……ですか……？」

「（……この間隔では、二本と認識できないか……）……なら、これなら如何だ……？」

「……あ……二本ですね……」

「ふむ……この程度なら、判別できるか……」

丸めた針を一本か二本を用いて腕や手の各所を押すことで、その感覚を確認する。

「……この指に力を入れてみる……」

「は、はい……！」

「……ふむ……判った……今度は、次はこちらの指に力を入れてみる……」

「は、はい……！」

更に左腕の各関節の動き具合を確認する。

他にも幾つかの検査で左腕の感覚や動作に関して確認を進めて行く。

しかし、これらの検査結果は、第三者が見れば芳しくないものと思うことだろう。

針による感覚の確認では、針の圧迫に鈍く曖昧にしか感じられず……
左腕の各関節は、左肩以外の各関節は幾らケルティスが力を込めても、ピクリと微かに痙攣する程度の微動しか見せない……

だが、そんな結果を目にしたセスタスの見解は異なっている。

「……………だいぶ、改善して来ているな……………」

検査結果をケルティス用の診療簿に記入しながら、そんな呟きを漏らした。

*
†
*

実の所、ケルティスは誕生した頃から左腕に問題を抱えている。
ケルティスが誕生した際、外見上は一切の問題は見受けられなかった。しかし、彼の左腕は肩より先の感覚が無く、動かすことも出来なかった。

この事実が、誕生に関わったコアトリア家の人々や主治医たるセスタスを一時困惑させた。

その原因として、隻腕となったティマスより誕生した影響によるものであるとの推測がなされた。

ティマス自身は、左腕が欠損したまま誕生することの無い様に配慮した筈だったが、その予想以上に左腕喪失による心身の影響は根深いことを示したのだった。

ともあれ、左腕がありながら、その感覚は無く、僅かにも動かせ

ないと言う状態は、当然の結果として治療の可能性が検討された。
とある事情により、ティアスの左腕は聖霊魔法の『快癒』や『再生』と言った呪文を唱えても効果を顕すことがない。ケルティスの左腕に関しても同様の結果となった。

しかし、全く希望が無い訳ではなかった。セスタスやティアスの診察や検査の結果、肉体には問題はなく、それに霊体の方が左腕を欠損しており、肉体と霊体の差異による誤差に心身が適応しきれていないと見受けられた。

だが、この霊体の欠損は、時間が経てば再生の見込みは充分にあると思われた。

だからこそ、セスタスはケルティスの左腕の治療を神殿が求める検査の傍らで行っているのだった。

*
+
*

「……言い付けは、キチンと守っているようだな」

「はい……毎晩、メイにも手伝って貰って訓練は続けています」

「それは何よりだ……アリッサ、アレをこちらに……」

「は、はい……！」

左腕の具合を確認したセスタスは、傍らの助手　アリッサより一つの器具を受け取る。それは幾つかの革帯が取り付けられた木の棒を蝶番等の金具で連結した代物で、一見すると甲冑の籠手に少し似た形状をしていた。

セスタスは、これを手際良くケルティスの左腕に装着させる。上腕・前腕・掌・指と言った左腕の各所を革帯で各々の棒に固定して

行く。

その上で、まずは棒を連結している金具や革帯等を調整して、腕を十分に曲げた状態で固定する。固定の具合を確認したセスタスはケルティスに命じる。

「……よし……曲げるつもりで念と力を込める！」

「は、はい……！」

その声に応じて、ケルティスは動かぬ左腕に全力を込めるべく、念を凝らす。その左腕にセスタスは軽く触れ、その筋肉の動きを見極める。

そして、頃合を見計らってセスタスが口を開く。

「……………これで良いだろう。ケルティス、力を抜け」

「！……………は、はい……………」

曲がった左腕に力を入れていたケルティスは、左腕に込めていた念を解き、動かぬ左腕を脱力させる。

ケルティスが一息入れている間に、セスタスは再度器具を調節して、腕が充分伸びた状態で固定して同様の所作が繰り返される。

そして、そんな作業が腕や指を幾通りの曲げ方や捻り方を変えて繰り返された。

*
十
*

これらの作業は、ケルティスの左手を動かす感覚を獲得する為の訓練である。

この訓練は、“左腕が在る”と言うことを認識させ、“左腕を動かす”と言う感覚を身に付ける為に行われている。実際に行われる様々な腕の動きの組合せを器具の補助によって行うことで、左腕が動く印象を感じ取ることで、霊体が負っている左腕の欠損を再生させようと試みているのだ。

この訓練が巧く功を奏しているかを、セスタスが動きに対応した筋肉に反応が在るかを確かめ、訓練の内容は微調整が順次施されている。

そうしたセスタスの尽力のお蔭で、皆無だった左腕の感覚は、鈍く曖昧なものながら感覚を取り戻しつつあり、左腕の筋肉は関節を動かすにはいまだ微弱ながら、ケルティス自身の意思に対して微かな反応を示している。それらの変化は、誕生時の状態から見れば、充分驚くべきものと言えるだろう。

*
十
*

一頻りの訓練を終え、心身ともに消耗したケルティスは、大きく息を吐いて頂垂れる。

「……………ふう……………」

「……………お疲れ様、ケルティス君。これをどうぞ……………」

「あ、ありがとうございます」

そんな彼に、アリッサより疲労回復の薬湯が渡される。程好い温度に冷ましたその薬湯を、ケルティスは二口ばかりで飲み干して一息吐いた。

そんな彼に向けて、セスタスは声をかける。

「……そう言えば、今日は入学式のある日だったな。学院生徒になった感想はどんな感じだ……？」

「セスタス様、ケルティス君も入学したばかりなのですから、まだ戸惑うことが多いでしょうに……」

検査の間に診療室へ帰って来たフローリアは、セスタスの言葉に口を挟む。

「……えっと……まだ、よく分かりません……でも、お友達が出来ました」

そんな師弟の遣り取りを聞きつつも、ケルティスは拙い口振りで答えを返した。

「ほお……そうか……」

「それは、良かったですね」

「お友達と一緒に楽しい学院生活になると良いですね」

彼の答えに、セスタスとフローリア、それにアリッサの三人より喜色が滲む言葉が送られる。

「……はい、ありがとうございます」

三人の言葉に、少しばかりはにかんだ様子で微笑を返した。

第十一章：薬院の検査と……（後書き）

まだ、入学初日が終わらない……もう少しだけ入学初日の話が続きます。

さて、ケルティス君が持っている事情を開示させて頂きました。
（序章からちよつとばかり伏線らしき物を散らせていたのですが…
…巧く描けていたでしょうか……？）

よろしければ、ご意見・ご感想を頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0012x/>

賢者の息子と呼ばれても

2011年11月17日21時32分発行